

---

# 闇に咲く白銀の華

ばにえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇に咲く白銀の華

### 【Nコード】

N8479M

### 【作者名】

ばにえ

### 【あらすじ】

大陸で名を知られるほどの魔法師であった少女は、ある日国王に呼び出される。実は彼女は4年前に失踪した国王の側妃だった。徐々に王に心を開いた彼女は、王妃として王と共に在ることを誓う。

…無事にお披露目を終え、王妃となった少女。王妃としての仕事に励む彼女に、多くの事件が襲い掛かる。いまだ国王に対して特別な感情を抱かない彼女に、国王の想いは届くのか。

「風に舞う白銀の華」の続編にあたります。



## 王妃を狙う者1（前書き）

初めて読む方はある程度、前作「風に舞う白銀の華」を読んでおいた方がいいかもしれません。

## 王妃を狙う者1

大陸で広大な領土を持ち、強い力を持つ大国ディスタール。王妃を亡くした国王ディリアスは、新しい王妃として側妃であるティシャルの元王女、ユティシア・ティシャルを選んだ。彼女は4年前にディスタール国を飛び出し、消息不明となっていた姫だった。国王の深い寵愛を受ける彼女の評判は非常に悪く様々な噂が流れていたが、彼女の本当の姿を知るものはいなかった。国王はお披露目によってようやく彼女の姿を人々に見せたのだった。

ユティシアはお披露目を無事に終え、自室にいた。お披露目は、うまくいったと思う。貴族達への評判は、多少は改善されたのではないかと。

…とはいっても、元々醜聞の多いユティシアの評判がそう簡単に改善されるはずもない。

お披露目を何とか乗り切り、疲れているので休むのかと思いきや…机の上にどさつと大量の本をのせ、その一つを手にとり読み始めた。

ユティシアは騎士団の転移門から大陸中を駆け回り仕事をしていたので、色々な国の書物をたくさん持っている。最近はお披露目などで忙しくて読む暇がなかったので、徹夜で読破するつもりだった。

ユティシアは時間も忘れ、ひたすら本に没頭していた。

コンコン、とノックの音が響き、がちやり、と扉の開く音がした。その扉は、王妃の間から王の間へと繋がっているものだ。

案の定、姿を現したのは王だった。風呂あがりのその姿はご婦人が見れば卒倒するだろう。濡れた茶色の髪に、強い輝きを放っている王家特有の金の瞳。あまりにも整った彼の容貌は、女性的な美しさではなく、男性らしい精悍さがある。

デイリアスはユティ、と声をかけるが、ユティシアは本を一生懸命読むあまりか、王の方を向こうともしない。

「ユティ、もう寝るぞ」

デイリアスの存在に気付き、ユティシアはやっと顔を上げた。

デイリアスはもう一度、寝るぞ、と言った。

「?どうぞ、お休みになってください」

それならば、休めばいい。陛下はお披露目のために今まで睡眠も削って頑張ってきたようなのだから。ユティシアはそう思ったのだが、デイリアスが眉をひそめているところを見ると、そういう問題ではないらしい。

デイリアスはきょとんと首を傾げるユティシアを見て、ため息をついた。

…お披露目で正式に王妃として認められた今日の夜は、デイリアスにとつて初夜と同等の意味を持っていたのだが、ユティシアはまったくそんな気がない。まあ、期待はしていなかったが。…でも、王妃の部屋を訪れた時点で少しでも察して欲しかった。

「そうではなく、一緒に寝ようと言っている」

デイリアスがベッドに腰掛ける。…が、いつも従順なはずのユティシアは動こうとしない。

デイリアスはむっとした様子でユティシアの元に歩み寄る。熱心に

読んでいた本をユティシアの手から取り上げた。

「陛下…」

抗議の声をあげようとしたユティシアは、体がふわりと浮き上がるのを感じた。

「ちょ、ちよつと…陛下!?!」

ユティシアはディリアスに抱き上げられていた。ユティシアはとっさにディリアスの首に抱きついた。

「さつさと寝るぞ」

とき、とユティシアをベッドに下ろすと、ユティシアを抱き込んで布団に潜る。

「お休み、ユティ」

ディリアスが額にキスをすると、ユティシアは諦めたのか、静かに目を閉じ眠りについた。

## 王妃を狙う者1（後書き）

再び、白銀復活です。

また、前回同様短く区切って話を載せていきたいと思えます。

短くて満足できない方や、1話が短すぎると話の流れが分かりにくい、という方、それとも短い方が読みやすいのでこのままがいい、という方がいらっしやいましたら、ご意見ください。

作者は、その辺よく分からないので、どうやって載せようか正直迷っています。

## 王妃を狙う者2

もう時間は深夜になっていた。窓から月明かりが差し込み、彼女の美しい容貌を照らす。月光によって銀の髪はきらきらと輝き、その姿は神秘的にすら見える。ユティシアは身じろき一つせず、横になつて眠っている。

その顔を、いとおしそうに見つめるディリアス。

…彼女を王妃に選べてよかったと思う。

大国の国王の側妃という立場にいなながらも、自国が占領されそうだという危機を察知し城から抜け出した女など、何年も忘れ去っていた。しかし、彼女と出会い、関わっていくうちに彼女の魅力に引かれていった。

今やその存在はディリアスにとってかけがえのない存在だ。まだ自分に振り向いてくれる気配はないが、徐々に信頼してくれるようになっていく。

ディリアスが彼女の頭を撫でようと、美しい髪に手を伸ばしたその時、ユティシアが起き上がり布団を跳ね除けた。　　殺気だ。ディリアスも一拍遅れて気付く。

暗闇の中からするりと人影が現れる。突然、ユティシアが暗殺者に襲い掛かった。懐に入り、鳩尾に魔力をねじ込む。暗殺者は次々と意識を失っていった。

ユティシアはディリアスの方へと視線をやる。ディリアスが発した暗殺者に対する殺気に反応したのか、こちらに殺気を放つ。まずい、このままでは…そう思ったディリアスは彼女より先に動き、彼女を床に押さえつけた。

「ユティ、ユティ、おい起きろ」  
おそらく彼女は完全に意識が覚醒していない。そうでなければディリアスを襲ったりしないだろう。

「あ……」

ゆっくりと目を覚ましたユティシアは、不安げな顔でディリアスを見つめる。

「…申し訳、ありません…」

覚醒した彼女は、自分のしたことが分かっているようだった。瞳は揺れ、今にも涙をこぼしそうに見えた。

「もう大丈夫だから、落ち着け」

ディリアスは暗殺者を見回りのものに引き渡すと、ユティシアの背中を優しくなで、抱き上げて寝台に連れて行った。

ユティシアはディリアスに縋るように服を掴み、はなさなかった。

そのまま、彼の温もりを感じながら再び眠りについた。

翌朝、ユティシアは寝坊してしまった。

原因は…間違いなく昨日の読書だろう。不摂生をしないようにしようとしてユティシアは心に誓った。

……侍女のミーファが、寝坊をした自分に、良かったですねえと言っ  
って満面の笑みを浮かべたのは何だったのだろうか？

### 王妃を狙う物3

「王妃様、昨夜は大変刺激的な夜を過ごされたのでは？」  
いつもの日課で暇つぶしに執務室に行くなり、宰相であるローウエにそう問われた。

「確かに、昨日の襲撃者の件は刺激的…と言えば、そうなのかもしれない。記憶にはあまりないが、最近身体がなまっていたし調度良かったのかもしれない。」

「そうですね。予想以上に刺激的でした」  
ユティシアは素直に頷く。

「…思いがけない答えにローウエは無言のまま固まっていた。  
どうしたのだろうか、とユティシアは首をかしげる。」

「くくくつつつつ」

ディリアスが声をあげて笑い出す。

「ローウエ、お前の負けだな。ユティシアを、からかつつもりだったのだろう？」

「まさか、こんな反応が返ってくるとは」

ローウエは降参、といった風に両手を上げた。

「実のところ、昨日の夜何があったのですか？」

ローウエが問うと、突然ディリアスの顔が真剣なものに変わる。

「実は、ユティシアの部屋に暗殺者が送り込まれた」

「…やはりまだ、王妃の座を狙う者は多いようですね」

ローウエは顔をしかめる。

ローウエと会話をしていたはずのディリアスがいきなりユティシア

の方を向いた。

「ユティシアは、何故あの時気付けたんだ？」

彼女の気配を察知する早さは、ディリアスでも舌を巻いた。人の気配を察知することに慣れている自分でも、ユティシアより気付くのが遅れた。

「えと…昔は寝込みを襲われることが多かったので…無意識に感知用の結界を張り巡らせるようになったのです」

…もちろん襲ってくるのは魔物。討伐に行って野営の際に襲われることなど頻繁にあった。魔物は夜に活発に動くので。まあ、師匠もたまに寝込みを襲うというありえない冗談をしでかしてくれたが。

「そんなことも出来るのか。しかも、魔法を近接戦に応用していたな？」

「はい。それほど得意ではないのですが…」

そうは言っても、暗殺者を一撃でのしてしまう實力はかなり凄い。

ユティシアの基準はずれている、と思わなくもないディリアスである。いまだ彼女の本気を誰も見たことがない。それと同時に彼女の限界も見ることがない。一度本気で手合わせしてみたい。

「そうか。ユティ、いくら腕が立つといっても十分気をつけるのだぞ？」

そう言っていた、矢先。翌日のことだった。

「大変だっ！ユティシアちゃんが攫われたっ」

慌てて駆け込んで来たのは騎士団長のゼイル。

中庭を散歩している時に突然、何者かに攫われたのだという。今は

お披露目の後で賓客がたくさん滞在している。犯人はそれを狙ったのだらう。

ディリアスは護衛をつけておかなかった自分の甘さに齒噛みした。ユティシアは腕が立つから大丈夫だと、多少樂觀視している所があった。彼女の自由を縛りたくなかったという思いもある。だが、そうは言っても彼女はディリアスの守るべき対象であり、これは明らかに自分の失態だ。

「それで…犯人は？」

「今のところは…分からない」

ゼイルの言葉にディリアスは絶望する。

その後もユティシアにつながる情報は、まったく出て来なかった。

### 王妃を狙う物3（後書き）

何か「闇に咲く…」のほうに変わってから、読者が減ったような…  
完結した「風に舞う…」のほうがアクセス数多い…

弟の次は友人と賭けを始めた私です。

弟はアクセス数負けた方が何かおごる、でした。

友人との賭けは、9月までに四十万アクセスいかなければ私がおごる、というもの。

皆さん、じゃんじゃんアクセスして下さい。

できれば、評価ポイントもよろしく願います。

#### 王妃を狙う者4

ユティシアは中庭に向かって歩いていった。今は、お披露目の後で城の中には賓客がたくさんいるのでにぎやかである。そんな中で、ユティシアがくつろげる場所は誰も人がいない中庭だった。

デイリアスは部屋を出る時に護衛をつけるよう言ったが、自分の散歩だけのために護衛などつけられない。

廊下を歩いていると、たくさんの人に視線を向けられる。お披露目以前に使っていた変身の魔法はデイリアスによって禁止されたため、使えない。あれがあれば、誰にも見られずにすむのに。

「あら、あなたが噂の王妃様？」

中庭で花を見ていた時に声をかけてきたのは、知らない令嬢だった。昨日のお披露目にはいなかったはずだが。

その容姿は美しく、華やかである。着ているものを見ると、少なくとも中流以上の貴族家の令嬢のようだ。

「あの、どなたでしょう…？」

「私、体調不良で昨日のお披露目に出席できなかつたんです。でも、一目でも新しい王妃様にお会いしたいと思って、参りましたの口元に、美しい笑みを浮かべる。」

普通、王妃に問われて名乗らないなどというのは無礼である。その態度だけで、自分がどれほど下に見られているのかが分かる。

「まさか、王妃様がこんなに素敵の方だとは思いませんでしたわ」

そう言つてユティシアの手を取り、強く握つた。

「ありがとうございます」

令嬢の態度は明らかにおかしいが、何も気付いてないふりをして普通に接する。

「あなたは、もしかして陛下の側妃候補の一人ですか？」

「まあ、知っていたらしたの？そうよ。昨日のお披露目で敵は消えたから、私が側妃に選ばれるのは、確実ね」

彼女の敵というのは、お披露目でユティシアに暴言を吐き、殴りかかるうとした女性のことだろう。

「どう？そちらでいっしょにお茶でもしませんこと？私が側妃として陛下のお傍に上がる前に、ぜひ親交を深めておきたいもの」

ユティシアは、中庭にあるテーブルで彼女と一緒にお茶を飲むことになった。

「どうです？これは、私のおすすめの茶葉ですよ？」

令嬢はユティシアに紅茶を勧めてきた。礼を言つて受け取つた。

「では、私の作ったお菓子でもいかがですか？」

ユティシアが取り出したのは、フルーツのパイだった。

「これは、他国で仕入れた珍しい果物が入っています。私のお気に入りなのですが……」

「まあ、王妃様の作られたものなの？嬉しいわ。ぜひ食べたいわ」  
そう言つて、令嬢はユティシアの手からそれを受け取り、口に含む。

「おいしいですわ。こんなの、初めてですわ」

そう言いながら、どんどん口に入れていく。

ユティシアはそれを見ながらユティシアはパイを一口、口に含む。  
そして、いい香りのする紅茶を飲んだ。

その瞬間、嫌な味が口の中に広がる。

ユティシアの身体は傾き、椅子から崩れ落ちた。

「ふふっ、うまくいきましたわ。馬鹿な女ね」

女は、先ほどとはまったく違う、嘲るような笑みを浮かべてユティシアを見ていた。

## 王妃を狙う者5

「さあ、運んで」

女がそう命じると、従者の男はユティシアを担ぎ上げる。

先ほどの紅茶には毒が仕込まれていたようで、ユティシアは動かないままである。

女は城から出ると、そのまま馬車に乗った。気を失ったユティシアは、男の手によって馬車の中に転がされた。男が女の隣に乗り込むと、馬車はすぐに出発した。

「まさか、こんなにうまくいくなんて、ねえ？」

女は従者に話し掛ける。

「そうですね。やはり、お嬢様は最高ですよ」

従者がにこりと笑って応じる。

女はたいそう従者を気に入っていた。見た目も良いし、自分によく使えてくれる。突然屋敷に来た、どこの者かも分からないような男だが、今はその出会いに感謝している。

「陛下のお傍にるのは私のはずよ」

自分は、昔から陛下の妃になるのだと言われて育ってきた。こんな化け物に陛下を渡してたまるものか。後で、絶対に正体を暴いてやる。

彼女は見た目が良いため、使用人から過剰な愛情を受けて育った。実は、側妃となる話などまったく出ていないのだが、使用人が「王妃様にも勝る美しさです」とか、「化け物に勝てないわけがありません」

せん」とか言うので、勘違いしてすっかりその気になっていた。

馬車は数十分走ると、大きな屋敷に着いた。女の自宅のようだ。ユティシアは馬車から下ろされ、牢に放り込まれた。

「これで貴女も終わりね」

女は、腕を縛られいまだ目を覚まさないユティシアにそう言って、牢を後にした。

女が牢を去り、人の気配がなくなったのを確認したユティシアは、腕にかかった縄を解いて起き上がった。

実はユティシアは気を失ってなど、いなかった。紅茶に含まれた毒は、効力を発揮していなかったのだ。

ユティシアがお茶のときに取り出したパイ。

あの中に入っている果物は他国で手に入れた希少な物で、解毒作用を持っていた。

紅茶において毒が入っていることに気付いたユティシアは、果物のパイを令嬢に勧めるふりをして、解毒のために自分も食べた。

毒が入っているか判別するのは手慣れたものだ。ユティシアは母国ではよく食事に毒を混ぜられていた。そのため、ユティシアは毒に関する本を読み、生き延びる術を習得した。毒に対する耐性はある程度あるが、今回の毒はさすがにまずかった。

…あの毒は量を間違えると死をもたらすのだが、理解して使ってい

るのだろうか。

紅茶に入れられた毒は、明らかに致死量だった。少量ならば気を失う程度で済むが、あの毒は毒殺に利用されることもある。しかし、あの毒の唯一の欠点は、量が多くなるとかすかにおいがするのだ。そのため、毒の知識がある者の毒殺には利用できない。

「早く、戻らないと…」

きつと、デイリアスは心配してくれるのだろう。デイリアスが自分を大切にしてくれているのは、分かる。自分に何かあるたびに悲しそうな顔をするから。

城は今ごろ大騒ぎになっているに違いない。そうだとしたら、またデイリアスに迷惑をかけることになる。それだけは避けたい。

幸い、魔法を封じられることはなかった。これなら、いくらでも逃げる方法はある。

…まあ、封じられても魔力の強いユティシアには、効かないのだが。魔封じなど、魔力を解放すれば簡単に解ける。解放した折に周りの建物が無事であることは保証できないが。

「とりあえず、ここを出ましようか…」

ユティシアは魔法で鍵を開けると、ドレスの埃を払って立ち上がる。感知魔法で周囲に人がいないかきちんと確認してから牢を出た。

## 王妃を狙う者6

ユティシアは牢を抜け出すと、屋敷の探索に向かった。逃げ出すわけがない。逃げ出すなら、何のためにわざわざ捕まったのかわからない。

令嬢に毒を仕掛けられた時に、抵抗するなり何なり出来たけど、ユティシアはそうしなかった。それは、令嬢に関するある噂があったからだ。

ユティシアの狙っていた物は、忍び込んだ一つ目の部屋で難なく見つかる。

### 人身売買の証拠。

令嬢は人を攫い、他国に売り渡していた。

このことが、なぜ露見しなかったのか。令嬢は、あまり頭がまわるようには見えない。本当ならば、すぐに見つかって処罰されていたことだろう。

これには理由がある。一つには、令嬢の父親は国王に重用されている大臣の一人でありこの本邸に顔を出すことはなく、普段は令嬢と使用人たちだけであること。

そして、もう一つは

「あなたは囚われの身の立場で、何をしているのでしょ？」  
そこに立っていたのは、従者の男。腰にある剣に手をかけているが、ユティシアがそんな脅しに屈するわけもなく、男を見つめる。

「それはこちらの台詞です。この邸であなたは何をしているのですか？」

…犯人は、間違いなくこの男だ。すべて裏で事を動かしていたのは、この男。この男、ただ者ではない。おそらく、令嬢以外の、大きな力を持った誰かの指示で動いている。この男の手によって、令嬢の犯罪は綺麗にもみ消されていたのだ。

「あなたは、この女性を使って、何をしようとしたのですか？」

「関係ない。それより、あなたには消えてもらわねば」

男は、剣を抜く。

ユティシアも、男が剣を抜いたのを見て攻撃に備える。

「私ごとき消えたぐらいでは国は揺るぎませんよ」

「そんなの、やってみなければ分からないだろう？」

男が、ユティシアに切りかかった。

「ちよつと、どこ行つたの？私の従者、出てきなさい！」

令嬢は探しながら、各部屋を覗く。お茶を始める準備を頼みたかったのだが。令嬢は次々に部屋の戸を開けていく。

しかし、ある部屋で足を止めることとなる。

「な、なによ…これ…」

令嬢は言葉を失った。

そこにいたのは、牢に入っていたはずの王妃と、倒れて気を失っている従者。

「あなた、自分が何をしたか、理解していますか？」  
王妃は冷たい目で令嬢を見つめる。

「こんなことをする方は、陛下は認めません」

「なにも…悪いことはしていないわ。王妃は、化け物だもの…殺して、当然。陛下をだまして富と権力を手にした。陛下を救うのは、当たり前じゃない。…あなたみたいな女より、私のほうが陛下にふさわしいに決まっているわ!!」

「では、人身売買のことは、どうやって説明するのですか？」

「なんで、それを…」

女は、明らかな動揺を見せる。

「悪いことをしている人の事は、自然と耳に入るのでしょ？」  
ユティシアはにっこり笑った。

「もう…生かしておけないわね。あなたたちつ、出てきなさい!!」  
令嬢の一言で、黒い衣服を身につけ、顔を隠した者たちが姿を現す。  
30人くらいはいるだろうか。

「そう…こんな組織とも、つながっているのですか…」  
女は罪が増えるばかりだ。従者の男がユティシアに倒された今、女は無力だということを理解しているのだろうか。

「殺してしまいなさい!!」

女の命令で、黒服の男達がユティシアに襲い掛かった。

## 王妃を狙う者6（後書き）

ユティシアさんが、強いです。ちょっと怖いです。イメージ壊れてないかな？

でも、あくまでユティシアさんはいい子です。腹黒ではありません。

評価ポイント、ありがとうございます。

## 王妃を狙う者7

ユティシアは黒服の男達の攻撃を軽く受け流す。身体には身体強化の魔法をかけているため、簡単に攻撃を避けることができる。

「もう…諦めたらどうです？」

「うるさいわよっ」

「お父様が悲しまれますよ？」

「そんなこと、どうでもいいわ」

令嬢は強気の返答をしながらも部屋の隅で震えている。

男たちは懲りずに何度も襲い掛かってくる。

男のナイフを持った右手を捉え、そのまま力を利用し、投げ飛ばす。

近接戦は苦手だ。魔法は細かい制御が面倒なので使わない。ユティシアは幼い時に魔力の制御が出来なかっただけあって、今も細かい魔法はあまり好まない。

剣があつたほうがもう少しまとまな戦い方ができるのだろうが、ユティシアはなるべく魔物以外に刃物を向けないようにしている。

ユティシアは人を斬ったことがなかった。怖いのだ、人を傷つけるのが。騎士団“光の盾”で魔物の討伐以外に依頼を受けなかったのはそのためだ。ユティシアは自分の力が並外れていることを自覚している。だからこそ、人をむやみに傷つけてはいけない。自分が本当に刃を向けるのは、魔物のみ。

「さて…こちらも終わりにしましょうかね…」

そう言うと、ユティシアは呪文を唱える。

その瞬間、大勢いた男たちは全員気を失い、床に倒れた。

「やめてっ！来ないで！」

ユティシアはその声を無視して近付いて行く。そして令嬢に向かって手を振った。

「可視」

やはり。令嬢の周りには黒い靄が発生する。

またか…と思わないでもない。以前、騎士団でも同じことがあった。

魔。

どこで魔物と遭遇したかは知らないが、彼女は魔によって暴走し王妃を攫うに至ったわけか。人身売買については魔に憑かれる前からだろう。

「払え」

短く唱えて彼女の魔を取り払う。

「さてと…すべて白状してもらいましょうか…」

ユティシアは令嬢の肩を掴むとにっこり笑う。

「素直に言ってください。全部」

ユティシアの無邪気な笑みに令嬢は不覚にもときめいてしまう。

彼女があまりにも愛らしいのだ。先ほどの圧倒的な戦いが嘘のように、可憐で庇護欲をそそられるような印象がある。

令嬢はもう、彼女に憎しみを向けられなくなっていた。

「いつ、言いますわよっ」

「ありがとうございます」

ユティシアがまたにっこり笑うと令嬢は頬を赤くした。

## 王妃を狙う者。

「おい、ユティシアに関する情報はまだなのか!？」

「も、申し訳ありませんっ」

捜査にあたる騎士は激しい感情を表に出している国王を、怖れている様子だった。

明らかに、国王の気が立っているのが分かる。こんなに取り乱す王を見たのは初めてだろう。今までこれほどまでに王の心を乱す存在はなかったのだから。

「落ち着いてください、陛下」

「いなくなつて、何日経つていると思つている!？」

宰相のローウエが王の心を静めようとするが、うまくいかない。

ユティシアが誘拐されてから、もう五日経っていた。

まだ王妃の誘拐犯は誰なのか、見当もつかない。それどころか事件に関して何も情報が出てこないのだ。

国王デイリアスの表情は、日に日に厳しさを増す。彼は焦っていた。執務も放り出してユティシアの情報を待ち続けている。

これほどまでに彼女を愛していたのか、と再認識させられる。デイリアスのユティシアに対する愛情はさらに深くなっているようだった。

「俺には、ユティが必要なんだ……」

デイリアスが、幼馴染である宰相ローウエと騎士団長のゼイルに向

かって、そう漏らした。

ユティシアは、理想的な王妃だと思っている。美しくて、淑やかで、控えめで、優しい。誰かに無理を言うこともなく、周りに気を配ることができる。王妃の権力を利用し、金を無駄に浪費して民を苦しめるようなこともない。義理の娘フィーナとも仲が良く、本物の親子のようだ。

デイリアスが、ユティシアと接する時だけ優しげな笑みを浮かべるのを、ローウエとゼイルは知っている。今までどんな時でも気を緩めることがなかったのに、彼女だけは違うのだ。

ユティシアも、デイリアスを愛している。あまり人に対して心を開かない彼女だが、デイリアスに対する信頼は格別のものである。今はまだ、恋愛感情まではいかないのだろうが、これから彼を愛するようになるのではないかと思う。

彼女は、どんな時でもデイリアスを拒むことがない。正直あれば邪魔になるだろうと思うくらいの溺愛ぶり。ローウエがそんなことを先日デイリアスに言ったら、こう答えたのだ。

…ユティシアは、好意を見せてくれるのは嬉しいと言っていたぞ、と自慢げに。

その答えは、優しく、人を厭うことを知らない彼女だからだろう。普通、そんな面倒な夫は完全に嫌われているはずだ。…本人には言わないが。

そんな彼女だからデイリアスは好きになった。ありのままのデイリアスを受け止めて、優しさを与えてくれる。だから、ローウエもゼイルも彼女が好きなのだ。

ユティを、醜い争いに巻き込みたくない

ローウェはふと、デイリアスのそんな言葉を思い出した。

彼女は、政治的思惑によって繰り広げられる水面下での争いなど、ほとんど知らないだろう。互いを蹴落とすために、血が流されることもある。過去、人々から負の感情向けられてきた彼女だが、本当に醜いことは知らないからこそ純粹でいられるのだろうか、と思わないでもない。

以前ゼイルが、彼女は人を斬ったことがないと言っていた。武人は、その目を見れば分かるのだそうだ。彼女の実力は優れていると思うが、それが人を斬ることによって身についたものでないというのは、納得できる気がする。

穢れを知らない彼女。

無垢で常に守ってあげたくなる存在。そんな彼女が、この一番醜いものが集う場所で生きていけるのだろうか。

あるいは、彼女ならその淀んだ場所さえも、綺麗に浄化できるのかもしれない。彼女の澄んだ瞳からは、強い光も感じる。

これ以上は苦しむ幼馴染の姿を見てはいられなかった。デイリアスは、すでに限界を迎えていた。

苦しみや悲しみを心の内に抱えこみ、決して人に弱みを見せないデイリアス。彼には、ユティシアの存在が必要だ。彼の心は、彼女の手によってしか癒されることはない。

早く戻って来て、デイリアスの心を休めて、癒してあげて欲しい…  
そう願わずにはいられなかった。

## 王妃を狙う者9

そんな時、ユティシアが帰ってきた。…犯人まで連れて。

「きゃっ……」

自室への転移魔法に失敗したらしい彼女は、執務室にいるディリアスの上に落ちた。

ディリアスは持ち前の運動神経で彼女をうまく抱きとめた。

彼女は男物の粗末な服を着ていて、何箇所か怪我を負っていたが、それ以外は無事のようだった。

「も、申し訳ありません…ご無礼を」

彼女はすぐにディリアスから離れようとしたが、ディリアスはユティシアを抱きしめたまま離さない。

「そんなことはいい…まったく、今までどこにいたんだ」

「えと…裏にある組織全滅させるのに時間がかかってしまっ……」

「……は？」

「えと…犯人が雇った組織が分かったので、倒しに行っていて……」

「結構人数が多かったなので、組織から逃走した人たちをすべて捕らえるのに時間がかかって……」

「…………」

「ところで…誘拐犯である令嬢ですが、いいように操られていたようです。首謀者は、彼女の屋敷に従者として入り込んだ男だったようです。さらに彼女、他にも人身売買などにも関わっているようです。…二人とも縄で縛って連れてきましたので、処罰は任せます。他にも関わっている者がいるようですのできちんと調べてくだ

さい。…あ、大臣である彼女のお父様は関わっていないので罰しないで下さい」

「…ユティシア、後で少し二人で話をしようか…」

「はい…？」

なぜか、デイリアスの顔は怒っているように見えた。

執務室を出たユティシアは、自室の寝台の上でミーファに手当てをしてもらった。

さっきのデイリアスの言葉が気になる。何か悪いことをしただろうか、自分は。

コンコン、とノックの音が響いた後、扉の開く音がした。

「へ、陛下っ…」

ミーファが焦った様子でデイリアスを止めた。

「いいじゃないか、夫婦なんだし」

「そう言う問題ではございませんっ！女性は恥ずかしいものなのですー！」

デイリアスはミーファの文句も聞かず、そのまま部屋に入って来た。…ちなみに、ミーファはうるさいので退出させられた。

ユティシアは手当てのために服を脱いでいた。先ほどまで着ていた衣服で身体を隠そうとするが、デイリアスの手で止められる。

「また、痩せたな…それに、怪我までして…」

デイリアスは、苦笑する。

「えと……」

ユティシアは少しだけ顔を赤く染め、俯いている。

普段ディリアスから何をされてもまったく羞恥心ない彼女だが、さすがに下着姿は見られたくないのだろう。

「しかも、顔に傷まで作って……。俺がどれだけ心配したかわかっているのか？」

ディリアスがそつと頬にある傷をなぞる。

「私が、王妃として認められていないからですね……申し訳……」

ユティシアの言葉は、彼の悲しそうな顔によって遮られた。自分を抱きしめた腕に込められた感情が伝わって来て、それ以上喋ることが出来なかった。

「もう……二度と俺の前からいなくならないでくれ。心配しすぎて、気が狂いそうだから」

「はい……もう、いなくなったりしません。ずっと、お傍にいます」  
ユティシアはディリアスの背中に手をまわして、ぎゅっと抱きついた。

ディリアスはずっとユティシアを抱きしめたまま、離さなかった。

## 王妃を狙う者9（後書き）

遅くなりました。

文章は8話目よりも前に完成していたのですが、昨日の深夜に更新しようとしたらお風呂に朝まで（合計6時間）入ってしまいました。すいません（汗）

手がふやけすぎると指先が痛くてキーボード打てないです。

母から注意されたのですが、長時間のお風呂は疲労や脱水症状などの原因になるらしいので、皆さん気をつけてください。

これから更新が滞るかもしれません。忙しくて書く暇がないので、ちよつとずつ書いていこうとは思いますが…

これからもこの作品をよろしく願います。

## 王妃を狙う者10

後日、ディリアスとローウエとゼイルの3人はユティシアから事件の話を詳しく聞いていた。

…内容をすべて聞いて、呆れた。毒にやられたふりをして、自ら敵の邸に行くなど…

「さすが、王妃様ですね」

「そうだな。敵を壊滅させるなんて、どんだけ強いのか」  
ローウエとゼイルが賞賛の言葉を贈る。

「そういえば、陛下」

「何だ？」

ユティシアの告白を聞いて机に突っ伏していたディリアスが、顔を上げた。

「従者の男ですが…他国の間者のようですね。この国を内側から崩そうとしているのでは…。今、うちを狙っているのは、隣の…と、軍事力をつけてきた…でしょうか…あ、でも……」  
どんだん喋る彼女の口からは、国家機密とも言えるような重大なものもたくさんあった。

「何で、そんなこと知ってるんだ」

「私、騎士団にいたとき私的に諜報活動していましたからね」  
今、さらっととんでもないことを口にしたような…。

「あ、もちろんこの国のことも知っていますよ。最近国境付近でどこぞの貴族が革命軍募っているとか、…の貴族が薬の取引してい

るとか、　　の貴族は領地で脱税してますし………」

デイリアスは国内の現状を聞いて啞然とする。

…愚かな貴族どもは父の時代に一掃したはずなのに、どうしてこんなことがまた起きているのだ。

「ユティ。知っていることを、すべて言え」

「でも…」

「いいから、言え」

デイリアスが今までになく怖い顔をしていた。

ローウエは驚いていた。

彼女は政治の闇の部分を知らないわけではなかった。詳しく語るらしいに、知っていた。闇を知りながらも光にあふれる彼女は、王を、国を、変えていけるのではないかと思った。彼女はきっと強い。その美しく、凜とした瞳は、この国を照らすの存在となり得るのだからか…

その後、国王の手によって、いつせいに貴族の摘発が行われたらしい。これは、彼の父親の行った肅清とともに、後の世に名を残すほどのものとなった。

## 王妃を狙う者 11

デイリアスは貴族の摘発によって、仕事量が膨大に増えていた。もちろん宰相であるローウエも忙しくしている。

「大変だなあ…」

「ですねー」

「ねー」

ゼイルとユティシアとその膝の上にいるフィーナは、ソファに座ってその仕事風景を見守っている。

…ちなみにゼイルの膝の上にはアルヴィンが、フィーナの膝の上には、シルフィがのっかっている。

ユティシアは久しぶりにフィーナと過ごせて嬉しいようだ。フィーナも、ご機嫌でユティシアの膝の上にいる。

「あの、陛下。私にもできることがあればお手伝いしますよ？簡単なことならできますし…」

「本当か？では、こちらの書類を任せる」

ユティシアは書類の束を受け取った。

「お前も手伝え」

そう言って不機嫌そうなデイリアスがゼイルに書類を投げてよこす。「へーい」

ゼイルは慣れているのか、すぐに書類整理を始めた。

ちなみに、ユティシアの書類の処理は驚くほど速かった。一応、デイリアスが確認したが不備はなく、文字も綺麗である。

これからは、政務の方を少しずつ手伝わせていっても良さそうだ。

「どこで、学んだんだ…？」

もう今さら何を聞いても驚かないが、一応。一応、聞いておく。

「私、一応王位継承権持っていたのですけれど。教育係がいなくなる前にはそれなりに勉強してましたよ？あとは…騎士団に、王族の方がいて…仕事を両立させるのが大変そうで、手伝ってあげていたのです。そのせいで、少しできるのです」

騎士団への入団に身分が問われることはない。ただ、すべての人に平等であるという騎士団の理念を守るのは、王族という立場ではかなり難しい。国の意志に従う時に騎士団が足枷になったり、逆の場合もありうる。

ユティシアはそれを両立させている彼の姿を初めて見た時、感嘆してしまった。思わず自分から手伝うと言ってしまっていたのだ。

ディリアスは少しだけ、彼女の騎士団での生活に感謝していた。不本意だがそこでの経験がなければユティシアは、今よりできることが少なかっただろう。まあ、何もできなくても自分は間違いなくユティシアを愛していただろうが。自分がユティシアに望むのは、王妃としての役割ではない。彼女の真つ直ぐで綺麗な心だから。

「また、有能ぶりを発揮しましたね、王妃様」

「あと、望むとすれば子どもだけかな？」

ゼイルはにやにやしながらディリアスを見る。

「おかあさま、フィーナもおとうとかいもうとがほしい！」

「ごめんね、フィーナ。無理なの」

フィーナの期待にあふれる目を見て心苦しく思いながらもユティシ

アは答える。

いつの間にかユティシアはフィーナにくだけた言葉で喋るようになっていた。その事実、ディリアスは軽い嫉妬を感じる。

…ではなくて。

「無理、か…」

いつの間にかディリアスはユティシアの目の前に立っていた。口角をつり上げ、恐ろしい笑みを浮かべている。

「それはどういう意味だ、ユティシア？」

「言葉の通り、出来ません」

「だが、ユティシアは…王妃だろう？」

…子をなすのも、王妃の役目の一つである。ディスタールには王子がいない。シャラの活躍によって女性の地位はかなり向上しているので、最悪フィーナを女王とすることは可能であるが、それでも王子を望む声は多くある。

「それとこれとはまったくの別問題です」

ユティシアは笑顔で言い切った。

慈悲も何もなくなればっさり切り捨てられたディリアスは明らかに落ち込んでいた。

「うっわー、かわいそー。見た、今の顔？」

「ですね。女性に対して百戦錬磨の陛下も王妃様には敵わないように」

ユティシアの発言の本当の意味を知るのは後のことである。

王妃を狙う者11（後書き）

ついに生まれた、ユティシアさんの無理発言。

抱きしられなくても口付けられても、顔を赤らめもしないユティシア  
さんです。

…ディリアスさんがいい加減不憫になってきました。

## 新しい魔法師長1

「ふーん、俺がいない時にそんなことがあったのか」

ユティシアの目の前でお茶をすするのは新しい魔法師長となったアルだった。先日のできごとをのんきに聞いている。

「というか、陛下。なぜ事件の時魔眼を使わなかったのです？」  
ローウエがもつともな質問をする。

過去にユティシアの魔力を見つけて城に連れ戻したことがあるディリアスだ。彼女の大きな魔力を感知できないはずがない。

「最近調子が悪くてな。黒い靄がかかったように、魔力が見えないのだ。いら立っていたのはそのせいでもあったんだ、すまない」

ユティシアはディリアスの顔を心配そうに覗き込んだ。ディリアスはユティシアを抱きしめ、耳元で大丈夫だと囁く。

「うっわー、見せ付けてくれるなあ」  
アルが不機嫌そうに言う。

「ゼイルと似て、口の利き方だけは立派ですね」

「うるせえ、これでも実力は一族最強なんだぞ」

「そうは言っても、まだ未熟ですからね。学ぶべきことはたくさんあるはずですよ」

「俺に教えられる奴がいないから仕方がないだろ？」

アルがちよつと偉そうに言う。

「師が、いないのですか？」

ユティシアは驚いてディリアスに尋ねた。

自分も魔法を教わるための先生はいなかったが。ユティシアは模倣によって術を学んでいた。しかし普通、魔法師は師匠に付いて学ぶのが一般的だ。魔法書だけでは、分らないことも多い。

「ああ。彼は一族最強だと言っただろう？彼は、長老に指南していたんだが隠居したらしくてな……。まだまだ伸びると思うのに、惜しいな」

新しい魔法師長を決める際に、長老が第一候補として上がり、アルは第二候補として選ばれた。それによって一族内は激しくもめたらしい。長老は前線で戦わせるには老齢であるし、アルはまだまだ経験不足で、年齢的に若すぎる。

その時、長老が自ら辞退を申し出た。これ以上の争いを避けるため、一族の長をやめて隠居を始めたらしい。第二候補のアルは自動的に魔法師長になっただけらしい。

「あの、私が指導してはいけませんか？」

ユティシアの提案に全員がユティシアの方を向く。

「できるのか？」

アルは、信じられないと言った顔でこちらを見る。

「ユティシア、言っておくが魔法に関してはゼイルより強いんだぞ？」

「そうだぞ。俺もあいつの魔法には敵わないんだ」

デリアスとゼイルがユティシアを止めようとする。

「アル殿、少し、こちらへ」

ユティシアはアルにこそこそと何か話し始めた。

「おおっ！なんだそれ！！」

「すげえ、そんなことできんの!?!」  
アルの顔がみるみる輝いていく。

「陛下、王妃様に学ばせてください!?!」  
アルは即座にディリアスをお願いしたのだった。

とはいったものの、ディリアスがそれを簡単に許すはずもなく…

「ユテイが怪我などしたらどうしてくれるつもりだ」

「大丈夫ですよ、陛下。心臓が止まらなければ、治癒は可能ですか  
ら」

無邪気に言うユティシア。

「そういうことじゃないだろう。俺は、お前が痛い思いをするのが  
嫌なんだ」

「駄目ですか、陛下?」

ユティシアはディリアスの手を握って上目遣いに尋ねた。

こんなの、俺でなくても駄目といえないだろう。彼女の愛らしい顔  
で言われたら、どんな男でも願いを聞き届けてやりたくなくなるに違  
ない。

その後、ディリアスが了承したのは言うまでもない。

## 新しい魔法師長2

ユティシアとアルは訓練所に向かった。

もちろん、愛しい妻が心配でならないディリアスと、面白がっているローウェとゼイルも一緒だが。

さらに、ここで働いている魔法師の方々も集まっている。新しい魔法師長の実力が気になるらしい。

「さて、さつそく実戦といきましょうか」

ユティシアはそう言うつと準備を始める。軽い準備体操。

明らかに魔法を使う準備ではないが…誰もなにも言わなかった。

「おい、杖は使わないのか？」

「いいです。私はもともと杖を使いませんので」

ゼイルのように騎士は別だが、魔法師なら杖を使うのが当たり前だ。杖は魔法の威力を増幅させたり、魔法を補助する役割を持っている。杖によって魔法師の実力が大きく左右される場合もある。それほど大事なものである。

ユティシアは魔法師だが剣も同時に使用していたので、杖など使ったことがなかった。

「なめてんのか？」

アルはむっとした様子でユティシアに問う。

「いいえ…私は杖の代わりに剣を使用していましたが、魔法の試合で使うわけにはいかないでしょう？」

それでもアルは納得していないようだった。

「…さて、準備はいいですか？」

「おう」

アルは杖を持って構える。

「では、そちらからどうぞ」

ユティシアが挑発するように言う。

本人の性格をよく知るものなら彼女が人を挑発するような性格でないことはわかっている。

…が、アルはそうは思わなかったようだ。先ほどのこともあり、ついに怒った。

「じゃあ、遠慮なくいくぜ」

「…で、おい！いきなり上級魔術二つもぶっ飛ばしてんじゃねえか！」

ゼイルが叫ぶ。

ユティシアは驚いた様子もなく…

「すごいですね。さすが魔術師長なだけあります」

「だろ？王妃様はこれをどうするつもりだ？」

アルはそう言うと炎の上級魔法を2つ放つ。

魔法は空中で混ざり、大きな炎となってユティシアに襲いかかった。

ユティシアは、くるりと身を翻し、逃げた。

「そんなんで避けられるかよ！？」

魔法は上級魔法なだけあってその攻撃範囲はかなり広い。普通、これを避けることは出来ないだろう。

アルはユティシアが魔法を見て怖気づいて逃げたのかと思い、笑みを浮かべている。

「発動」

ユティシアは叫ぶと、ありえない速さで走り出した。身体強化の魔法だ。

魔法があたる直前、高く跳躍する。その直後、ユティシアが先ほどまでいた場所に炎が叩きつけられ、地面に煙があがる。

「この魔法は避けても追いかけてくるぜ！」

アルは再び魔法をユティシアに向けようとした。

が。

「なにっ!?!」

アルが驚いて声を上げた。

炎は、消えていた。

ユティシアは炎が地面に当たった瞬間を狙い、水の魔法で炎を包み込んで弱め、さらに地の魔法で炎を飲み込んだのだ。

「は、まだま、だ……っ」

自分の魔法が消えたことに驚いているうちに、いつのまにかユティシアが後ろにいてアルの手をひねり上げていた。

「降参ですね？アルどの。近距離では、魔法師は無力です」  
「くっそ……」

こうして、アルは呆気なく負けた。

## 新しい魔法師長2（後書き）

今回は長くなってしまいました。随分短くしたんですが…  
戦闘を省略したせいで、内容は最悪なことになっています。  
今回の話はノリで入れてみたので色々事故が起きていますが、駄目  
な作者を放っておいてあげて下さい。

### 新しい魔法師長3

試合が終わると、ユティシアはさっそく指導を始める。  
ディリアスとゼイルは剣で模擬試合をやって他の騎士たちに混ざって剣を振るっている。

「てか、魔法の試合なのに最後のあれは無しだろ!」  
アルが叫んだ。

「すいません」

「まあ…いいけどよ」

ふんつとアルがそっぽを向く。

「これから、どんな戦闘にも対応できるように私が育ててみせますよ」

「は？魔法師は後方支援が主だろ？何言ってる…」

「他人に守ってもらわなければ魔法が使えないなんて、悔しくないですか？」

「……………」

これは肯定だろう。

「いずれは、魔物も倒せるようになってもらいますね」  
ユティシアはふふつと笑った。

「さて、アル殿は魔法の制御が少し苦手ですね。それに、攻撃魔法以外は苦手でしょう?」

アルには決定的な弱点がある。攻撃魔法以外使えないことだ。今までは彼より強い者がいなかったから圧倒的な力で押し切ることが可能だったが、自分より同等かそれ以上の者と対峙した時は防御の魔法が必要不可欠だ。

「ああ…防御とか幻術とかそんな魔法は性に合わない」

確かにアルは正面から突っ込むほうが似合うと思うが…それだけでなく、魔力が大きいことも起因していると推測する。ユティシアも同じだが、魔力が大きいと魔法の扱いが難しくなる者がいる。

アルは魔力を持て余しているのが分かる。魔法を使う際に魔力を無駄に消費しすぎている。そのために魔力の消耗が激しく、一度の戦闘で使える魔法が減ってしまう。

「ではまず、防御の方を何とかしましょうか。アル殿、私に炎の魔法を放ってください」

アルは、上級魔法を使って炎の玉を放った。

ユティシアは手を振り上げて呪文を唱える。

ユティシアは別に呪文を唱えなくても魔法を使える。最上級の強さの魔物と対峙する際に悠長にそんなことをしている暇はない。別に呪文無しでもいいが…呪文を使ったほうが確実にだし苦手な術の制御もちよつとはましになる。

水の滝が現れ、ユティシアに向かって飛んできた炎を防いだ。

滝にぶつかった瞬間水蒸気が上がったが、それ以外変化はなかった。

「おおっ！」

アルが感嘆の声を上げる。

これは普通、攻撃魔法として使われるものだ。

ユティシアは水の滝によって自分への攻撃を阻むようにした。

「何事でも、発想の転換が必要なんです。分かりますね？」

「ああ！」

「アル殿は攻撃魔法が得意でしょう？わざわざ苦手なものを使って失敗する危険を伴うよりは、攻撃魔法を生かして戦闘を組み立てていけばいいんです」

「お前、すげーな！」

アルの目がきらきらと輝く。

アルは教えがいのある生徒だと思う。すごくよく話を聞いてくれる。正直、指導などしたことがなかったのでもうまくいくか心配だった。本当にこの子は、魔法のことになると目が輝くな。普段も自分の感情に素直になればいいのに……ユティシアはそんなことを考えていた。

## 新しい魔法師長4

「いいの〜？へーか」

「何が、だ？」

「ユティシアちゃんアルに完全に取られちゃってるけど」

「仕方がないだろう。彼を教えられるのはユティだけだ」

「またまたそんなこと言ってる。強がってない？」

「ない」

「おーひ様とアルの方が年は近いんだよ？4歳差」

それまでゼイルの言葉を気にも留めてなかったディリアスがぴくり、と反応する。

愛情に年の差なんて関係ない！とか言うかと思ったら、意外と年齢のことは気にしてんだな。ユティシアちゃん16だもんさ。へーかなんて彼女から見たらおっさ…いやいやこれ以上言っと危険だ。

「隙ありっ！」

ゼイルがディリアスに切りかかった。

ディリアスは避けたが間に合わず、胸の辺りを斜めに切られた。血がにじんできて服が赤く染まっていく。

「そんな動揺してて大丈夫〜？」

「貴様…」

「あっほらほらおーひ様と呼んでるよ。早く行ってあげないと」

ユティシアのほうを見ると確かに自分を呼んでいた。

「覚えているよ、ゼイル」

ディリアスはゼイルの喉元に剣を突きつけて言った。

「あつぶね〜」

ゼイルはこのとき本気で命の危険を感じたのだった。

「さて、他にも例を見せましょうか。アル殿、治癒魔法は、使えますか？」

「治癒魔法なんて、特別な奴らしか使えねえもんだろ？」

治癒魔法を使うにはたくさん修行がいるため、どうしてもそれだけに特化してしまう。気軽に使える魔法ではない。戦闘用の魔法を学ぶような者には使えないのが一般的だ。

…ユティシアは治癒魔法を使うことができるが。

「そうですね。でも、アル殿でも使える方法があるのです」

「本当か！」

「陛下。ちょっとこちらへ」

ユティシアが呼ぶと、ゼイルとの戦闘を中断してこちらへやって来た。

「何だ？」

「実験台になつてもらいます」

「な…」

ユティシアが呼ぶから来てみれば、アルの魔法の授業の実験台か…  
ディリアスは少し悲しくなった。アルをユティシアから離そうかと本気で考えてしまった。

「では…よく見て下さい」

ユティシアがディリアスの胸の傷に手をかざし、魔法を唱える。

あつという間に傷は治ってしまった…さらに、破れた服も一緒に直っていた。

「治癒魔法ではない…？」

治療を施されたディリアスは驚いているようだ。

「アル殿。今、私が何をしたか分かりましたか？」  
「修復魔法…？」

いまいち確信が持てない。修復魔法は、壊れたものを直すときなどに使う初步の魔法だ。魔法が及ぶ範囲は…モノだけであるはずだ。人に使用するなんて、聞いたことがない。

「正解です。これも、発想の転換ですね。人をモノとして認識することにより、人への適用が可能になります」

「へえ。お前、本当にすげーな！」

ユティシアはアルの頭を撫でる。  
本当に素直に聞いてくれるので、教えているこちらが嬉しくなってくる。

…何だか弟ができたみたいで、アルが可愛かった。

アルは年下だし、まだまだ子どもだ。ユティシアもそういう対象としては見ないだろう…おそらくは……だが、やはり気に食わない。彼のせいでユティシアとの時間が減るのは確実だ。

ディリアスは軽く苛立ちながらその光景を見ていた。

## 新しい魔法師長5

最近、ユティシアと共に過ごす時間が減ってしまった。それもこれもアルがユティシアの指導を望んだせいだ。

「どうしたのですか、陛下？」

ユティシアがディリアスの様子がいつもと違うことに気付き、声をかける。

ユティシアは周りの者によく気を配ることができる。ディリアスの気持ちもよく察してくれて、声をかけてくれる。

…だが、ディリアスが本当に察して欲しいことには鈍感なのである。

ある日の夜のこと。

ユティシアがディリアスの寝室を訪れた。

「陛下が眠るまで、一緒にいても…？」

ディリアスはその言葉に驚いたが、一緒にいたいと望んでくれたことが嬉しくて、つい抱きしめてしまう。

「いきなり、どうしたんだ？」

ユティシアは、ディリアスの腕の中で俯いて顔を赤くしている。

…これを言うのは、少し恥ずかしかった。子どもでもあるまいし、とも思っただが…

「その…この頃、二人でいる時間が減ったと思ったので少し、寂し

くて」

「ああ…俺もだ」

ディリアスの言葉に驚く。そのままユティシアは強く抱きしめられた。

ディリアスは少し困ってしまふ。

…よりもよってなぜ夜に会うことを選んだのか。少しは自分を男として意識して欲しいものだ。

ユティシアに問うと…

「ローウェ殿とゼイル殿に相談したら、夜ならお暇でしょう…」と

…あの二人、絶対、狙って言ったのだろうな。

彼らが自分を助けてくれてるのは分かる。ユティシアを意識させようと色々根回ししている。

「ご迷惑だったでしょうか…？」

「いや、そんなことはない。一緒にいられて嬉しい」

ディリアスはユティシアの唇に、自分の唇を重ねた。

「今日は一緒に寝るか？」

「いいのですか？でも…私、前のように暴走したら…」

それは、お披露目の夜に寝ぼけたまま暗殺者を退治した時のことだろう。

「大丈夫だから、寝よう」

ディリアスは以前と同じようにユティシアを抱き上げ、寝台へ連れて行った。

寝台へユティシアを下ろそうとすると、ユティシアは首に手を回したまま離れない。

「陛下…私は、自分の力が怖いです。誰かを傷つけたら…と思うと、いつも恐ろしくて…でも」

言葉を切ったユティシアは、身体を離してディリアスと視線を合わせてにっこり微笑む。

「陛下は、私の力を受け入れてくれました。嬉しかったです」

今まで、自分の力の一端を見ただけでも離れて行くものが多かった。ユティシアはただ、離れて行くその背を見つめているしかなかった。

だが、ただ一人ユティシアに手を差し伸べてくれた者がいた。もう、この温かな存在を離さない。…いや、離すことが出来ない。

「当たり前だ。ユティシアは、俺の妻だからな」

ディリアスはユティシアを抱きしめ、口付けを落とす。

「…ところで、夜に来たということは、襲ってもいいんだな？」

「……………え？」

一瞬、思考が止まる。

…陛下はこんな人だったのだろうか？

いつも自分に愛情を注いでくれて、優しく、頼りがいのある、旦那様。口付けは頻繁にされるが、そんなことを口にするような人だったのか？

…ディリアスが、並外れた美貌の持ち主であることを久しぶりに思

い出した。  
色っぽい表情を浮かべる彼は、さらにその魅力が引き立てられているように感じる。

「えと…陛下？」  
ユティシアは思わず後ずさった。

ディリアスはユティシアの手を捕まえて抱きしめる。

必死に身を離そうとするユティシアは、ディリアスの肩が震えているのに気付いた。  
…笑っている。

「…陛下、からかいましたね？」  
「…ユティシアは可愛いな。もう寝るぞ」

ディリアスは寝台に横になってユティシアを手招きした。

先ほどまで膨れっ面をしていたユティシアは頬を緩める。  
掛け布に潜ると、ぴったりとディリアスに身体をくっつけて寄り添った。

「最近、ヘーかとおーひ様、一緒に寝てるらしいね」  
「仲が良いようで何よりです」  
「アルが来て、おーひ様が離れていたようでヘーかが怒ってたけどな」

「俺のせいか!？」  
「うん。正直、邪魔だろうな、お前のこと」  
「まあ、逆に一緒にいる時間が増えたようですが」

ローウェとゼイルは嬉しそうです。

「結局俺は二人の仲を深めるのに役に立った訳か」  
アルが後日そう漏らした。

新しい魔法師長5（後書き）

ごめんなさいいっつ

ストーリーがまったく進んでないです。

というかこの話、正直必要なかったです。

## 陛下のお見合い騒動1

「ユティ、以前子を作るのは無理だと言ったよな？」

「はい。そうです」

「どうしても…駄目か？」

「今のところ、それはできません」

「そうか…」

ディリアスは悲しそうな顔をする。

「ユティは…俺のこと好きか？」

「はい、もちろんお慕いしております」

ディリアスの事は、好きだ。傍にいたいと思うし、誰よりも特別な存在だ。

「それは、家族としてか？…それとも、国王としてか？」

「どちらも、です」

先ほどからディリアスが何を問おうとしているか考えるが、分からない。彼の望む答えが、分からない。

「では、恋愛対象としては？一人の男としては、どうだ？」

恋愛対象…そんなこと、考えたことがなかった。だって、彼は家族で、国王で、大切な人。それ以外、分からない。他に、何かあるというのか。

困った顔をするユティシアに、ディリアスは苦笑する。

「分かっている。ユティシアがまだ俺にそういう想いを抱いてくれないことは。…でも、考えてみてくれないか？俺を男として、

見てほしいんだ」

「陛下……」

「今日は、もう寝ろ」

そう言っただけでデイリアスはユティシアを抱きしめて、寝台に横になった。

ユティシアは昨夜の会話を思い出していた。

恋愛……なぜ、彼がそんなことを口にしたのか。子どもについて言ったのか？

「王妃様。何かお悩み〜？」

ゼイルがのんきに質問してくる。

「実は……」

ユティシアは昨夜交わした会話について語った。

「おーひ様は、子ども欲しくないの？」

「それは……欲しいですけど」

「へーかはね、愛してるって言ってほしいんだよ」

ゼイルは教えてくれた。

人は皆、愛する人との子を望む。だから、ユティシアの意志を確認しておきたいのだと。好きでもない者と子を作れば、愛情を注げない可能性だってある。

「そうですか……」

ユティシアは納得がいったようだ。

「じゃ、頑張つて〜」

「はい！」

ユティシアは満面の笑みで頷いた。

「陛下…あの、お話があります」

ユティシアは寝台に座るディリアスに話しかけた。

ユティシアはディリアスと一緒に寝室で眠るようになっていた。ディリアスが毎晩ユティシアの部屋を訪れるため、もう諦めた。

「何だ？」

「側妃を、迎えて欲しいのです。私は、子どもを作ることには出来ませんから」

「ユティシアは、嫌ではないのか？」

「へ？」

「俺の心が、その女に向いてもいいのか？ユティシアへの愛情が、薄れてもいいのか？」

「それでも…私は、陛下のためなら…」

このぬくもりを失うのは、怖い。苦しんで、悩んで、やっと手にしたものだ。

それが離れていくと思うと、震えが止まらなくなる。いつまでも縋り付いていたい気持ちになる。

でも、自分が決心しないとこの国の世継ぎはいないままだ。

「俺は、お前が欲しいんだ。他の女などに興味はない」

優しく口付けられる。ディリアスの口付けはいつも優しい。

ユティシアはディリアスの口付けに身を委ねた。

「俺を、意識していないのは分かっている。…でも、いつか許してくれるまで待っている」

…ん？許してくれるまで…と言った？  
まさか……………

ユティシアはようやく自分が思い違いをしていたことに気付いた。

思い違いが本当であるとすると…

ユティシアは嫌な予感を拭いきれない。

…これは、何としてでも側妃を迎えてもらわねば！

ユティシアは一人、決心するのだった。

## 陛下のお見合い騒動1（後書き）

この作品、R15ついてなかったですね。  
いままで、それっぽいのが無かったかな？  
自分の記憶に自信が無いです…  
もし、問題あったらご指摘願います。

## 陛下のお見合い騒動2

今日は定期的に行われる大臣との会議の日だった。

正直、面倒だしつまらないことが多い。民のことを考えてくれるまともな者もいるが、自分の利益しか考えてない愚か者のほうが多い。そういう奴に限っていちいち話しかけてくるので煩わしい。

「陛下、そろそろ側妃を娶られてはいかがですか？」

……こういう話がいつかは出ると思っていたが……  
ディリアスは、はあ……とため息をつく。

「これ以上必要はない。マウラだって一人で十分王妃の役目を果たしていたらどうか？」

「聡明なマウラ様と比べられるのは間違っています」

最初に文句を言ってきた大臣をきっかけに次々と不満が述べられる。

「はつきり言つて、彼女では身分が低すぎます。このままでは陛下の権力も落ちてしまいますぞ」

「我々は彼女を王妃にするという陛下の願いをお聞きした。陛下も我々の話を聞くべきかと」

「そうです。いまだ彼女との間に世継ぎもいない。そうなれば側妃を娶るべきでしょう」

「陛下はこの国を潰す気ですか？」

……そこまで言うか。

ディリアスはうんざりする。

「とにかく、もう側妃は必要ない。妻はユティシアだけで十分だ」  
そう言い置いて、会議室を後にした。

ユティシアは廊下を歩きながら思索していた。  
今日は天気も良く、中庭で散歩するには調度良い。ユティシアの足は自然とそちらのほうへ向いて歩いていた。

「ん〜……………どうしようかな」  
ユティシアは本気で悩んでいた。

どうやってデイリアスに新しい妃を迎えてもらえるのか。  
陛下はあまり女性に興味があるようには思われない。  
お披露目の際に多くの女性に話しかけられていたが、必要最低限の言葉しか返さず、あまり干渉されたくないようだった。

「はあ〜……………」  
「う〜む……………」

思わずため息をつくとき、目の前から同じような声があった。  
みると、年老いた男性がいた。今日は大臣との会議があるとデイリアスが言っていたので、大臣の一人だろう。

「おう…これはこれは王妃様、お久しぶりです。そんな暗い顔をなさって、どうなされた？せつかくの美しいお顔ですのになあ」

「大臣殿こそ、なにか思い悩んでいるようでしたか？」

「いえいえ、王妃様にご心配をかけるほどではないのです」

「そうですか…私は、陛下に側妃を娶って頂きたいと考えておりまして。大臣殿はどう思われますか？」

「やはり、王妃様もそう思われておりましたか…」

「陛下に仕える身としては、やはりそうですね…」

二人揃ってうぐんと唸る。

大臣は王妃をちらりと見やる。

面白い方だ。王妃は、陛下が新しい妃を迎えれば取って代わられる可能性もある。陛下の寵愛を望むならこんなことは言わない。あまり、そういうことに頓着する人ではないのか。

「お見合いでも、企画しましょうか…」

ぼつり、とこぼした彼女のつぶやきに大臣は即座に反応する。

「それはよろしいですな！！ぜひとも私にも手伝わせて欲しいのですが」

それを聞いた王妃は、お披露目以来傾国と謳われているその美貌をきらきらと輝かせて言った。

「本当ですか！？大臣殿が手伝ってくださるなら心強いです！！」

幸運なことに、デイリアスは来週から視察に出掛けて当分帰らないと言っていた。その間にお見合いの準備をすればいいだろう。時間は十分にある。最高の美女たちをそろえて陛下をお迎えしよう。

こうしてユティシアは陛下のお見合い計画に向けて、大臣と動き出したのだった。

## 陛下のお見合い騒動2（後書き）

何日も放置したままでいました。ごめんなさい。

これからも見捨てず読んでくださればと思います。

ユティシアさんが動き出しました。

こうなったらユティシアさんは誰にも止められません。

きっとディリアスに止められるまで暴走し続けるでしょう。

### 陛下のお見合い騒動3

ユティシアは現在、お見合い計画実行を目指して陛下の執務室にいる。

「陛下、陛下の理想の女性とはどのような方ですか？…やはり、多くの人を束ねる才能のある頭の良い方ですよね？」

妃になるなら、多くの王族と接したりする機会があるはずだ。頭がいいのは最低条件だろう。失言は、夫である王に恥をかかせてしまおう。

デイリアスは、ああ、仕事の話かと思い当たり素直に答える。

「そうだな…頭が良いのは最低条件だ」

「では、どんな性格の人が好みですか？積極的な方がいいですか、それとも大人しめの方？」

「……大人しい方だ。あまりうるさいのは嫌だ」

そうか、マウラ様もそう言えば物静かできて知性のある方だったな…母上にあたるシヤラ様は大変にぎやかな方だが。シヤラ様はうるさいうちに入るのだろうか？

ユティシアは頷きながら紙に情報を書き込んでいく。

「では、見た目はやはり良い方がいいですかね」

「？そうだな…見た目も武器になり得るからな。印象は大事だ」

「見た目は美しい方？それとも可愛い方？」

「さあ…どちらでもいい」

「では…体型は？細身の方とふくよかな方ではどちらが？」

「どちらかと言えば細身か。あまり太ったものは自己管理が足りない証拠だからな」

デイリアスはユティシアの質問にほとんど答えていく。

途中から、髪の色だの瞳の色だの肌の色だの細かい話になってきたが、何だったのだろうか？

デイリアスは途中から怪しみ始めた。

ユティシアは何故いきなりこんなことを聞いたのだろうか？何のための質問だ？いつも割と大人しいユティシアが今日はよく喋る。

…考えているうちに気になってきた。

何か裏があると見た方がいいだろう。だが、ユティシアは一人でデイリアスを欺くような真似をするはずがない。そうすると、誰かが裏で糸を引いているのだろうか。

「ありがとうございます。お仕事、頑張ってください」

ユティシアは、デイリアスが聞いただす暇も与えず、話を聞き終わると部屋からさっさと出て行った。

ユティシアは陛下の好みを書いた紙を大事そうに抱え、大臣の下に急いだ。

計画のために集まった大臣の数は多い。こんなに陛下のためを思って協力してくれる人がいるとは、喜ばしいことだ。

「大臣殿、成功しましたよ。陛下の女性の好みを隅々まで聞いて来ました」

「さすが王妃様ですな。本当に細かく書いてありますな」

老人はその顔に深いしわを作って笑みを浮かべながら言った。

「では、あなた方はこの情報をもとに令嬢を集めて下さい」  
ユティシアがそう言うと、貴族の男たちがいっせいに動き出した。

明日からは陛下の遠方視察である。これから貴族たちも自由に動けるだろう。

ユティシアはわくわくしながら、お見合い計画を着々と進めていくのだった。

### 陛下のお見合い騒動3（後書き）

更新が遅くてすみません。

最近諸事情で忙しくて更新できない状況が続いております。

本当に申し訳ありません。

## 陛下のお見合い騒動4

デイリアスは星空を見上げていた。  
今は視察のため、城から遠く離れたところにいる。

……早くユティシアに会いたい……  
あの愛しい存在に触れていたい。早くあの綺麗な瞳に見つめて欲しい。

そう思わずにいらなかった。

ユティシアはどうしているのだろうか。きっと自分ほどに焦がれることはないのだろうと思うと、寂しくなる。

ユティシアはなぜ振り向いてくれないのだろう。……いや、それ以前にデイリアスを男として見ようとしてもしていない。  
自分の容姿に自信のあったデイリアスはどうすれば彼女の心を手に入れることができるのか、分からない。今までの女性はデイリアスの整った顔を見るだけで頬を染めていたのに。

ユティシアは容姿で人を選ぶような人ではない。ユティシアは良いのか悪いのか、自分の容姿にも他人の容姿にも無頓着だ。誰にでも笑顔を振り撒き、男女問わず心を掴んでいる。

……その光景を目にするたびに嫉妬にかられずにはいられないのだ。

帰ったら、一番に彼女の顔を見よう。きっと、彼女は「お帰りなさい」と言っただけで自分のもとに駆け寄って来てくれるはずだ。

…一方、ユティシアは、というと…

「さあ、陛下のいないうちに計画を練りますよ」

大臣たちも、おー！とか何とか言いながらユティシアの指示を待つ。

今回、大臣たちが集めた令嬢の情報は、約100人分だった。とはいっても、全員を陛下とお見合いさせるわけにはいかない。

「では、集められたご令嬢の中から、さらに厳しく審査して、20人選びます」

ユティシアは恐るべき速さで審査書類に目を通して行く。貴族たちも、互いに話し合っつて候補を外していく。

その光景を見て、初老の大臣はにやにやと笑っていた。

驚くべきは、彼女のカリスマ性だ。気付かないうちに誰もが彼女に従っている。

お披露目では彼女の美しさと高い教養だけが人を認めさせる要素かと思っていたが…彼女の指揮能力は高く、皆自然に彼女について行ってしまうのだ。彼女の才能は国王と同等かもしれない。

彼女は間違いなく人の上に立つ者だ。

この人なら、国を任せていいのでは…と不覚にも思ってしまった。

「彼女は教養も高く、陛下も気に入られるのでは？」

「いや、でも家格は低い方だぞ」

「では、こちらは？見た目もいいし、家柄も保証できる」

「そちらは…」

皆自分の身内を残すはずなのだが、会話の流れからするとそんなこ

とは忘れ去って真面目に選んでいる。

…これも、王妃の力なのだろうか？

「さあつ20人まで絞れました。あとはお見合いの形式ですが…」  
ユティシアが考え込んでると…

「では、まず全員で自己紹介するのがいいのではないですか？一人ずつだと陛下が途中で逃げるかもしれません」

「そうだな…どの令嬢にも平等に機会を与えなければ」

「  
」

周りのものは一斉に意見を出し始めた。

…それはもう、会議ではありえないくらい積極的に。

何度か討論を重ねた結果、完璧なお見合い計画が出来上がった。

ユティシアは満足げだった。

……これほど完璧な計画はない。きっと陛下も良い妃を選んでくれるのではないかと。

「計画は完成しました。では、陛下のご帰還の翌日にお会いしまし  
よう」

帰還の翌日…それこそがデイリアスのお見合いの日だ。

貴族たちはこの計画の完成に満足して喜び合っていて、まさか悪夢  
を見ることになるとは思ってなかった。

## 陛下のお見合い騒動5

ディリアスはついに視察から帰ってきて、城でユティシアの出迎えを期待していた。

しかし、ユティシアは出迎えてくれなかった。  
宰相のローウエが城の入り口に、にこやかな顔で現れた。

「ローウエ、ユティシアはどうしている？」

「部屋に籠ってずっと何かの作業をしていますよ。何をなさっているかまでは知りませんが、陛下が出発なさってからとても充実した日々を送っているようです」

正直、気に入らなかった。

ユティシアは自分を待っていないかったのだ。しかも、寂しがるところか、充実した生活を送っているのだと？

悲しみ、というより腹立たしさが湧き上がってきて、ディリアスはユティシアの部屋に向かった。

ユティシアは、部屋に籠ってお見合いの段取りの確認をしていた。  
…計画は完成したといっても、それをきちんとこなせなければなら  
ない。

ユティシアは計画表を片手に机に座っていると…

「ユティシア」

聞き慣れた声が耳に響く。それは、久しぶりに聞く声。

「陛下、帰ってこられたのですね」

ユティシアはそう言っただけでディリアスのもとに駆けていった。

「お帰りなさい、陛下」

ぎゅっと抱きつきながら顔を上げて上目遣いに見上げてくるユティシアを見ると許したくなるのだが、そういうわけにはいかない。

「ユティシアにぜひ、出迎えて欲しかったんだがな。正直、俺は寂しかったぞ？」

ディリアスもユティシアを抱きしめ返ししながら、言った。

「それは、すいません。でも、陛下のためです」

「俺のため？」

「はい、陛下のために私があるとある計画を立てたのです」

「そうか、それは嬉しいな。…ちなみに、どんな計画だ？」

「それは秘密です」

ユティシアは、ふふ、と笑う。

「明日になったら分かりますよ。楽しみにしてて下さいね」

その夜、ユティシアはディリアスと共に眠ることをせず、お見合いのための準備に没頭した。

翌朝、ユティシアは顔を洗って気合を入れた。

…多少寝不足だが、今日のためなら仕方がない。

なぜなら今日は、お見合いの日だからだ。

陛下の妃獲得のため、絶対に成功させようと心に誓うユティシアだった。

陛下のお見合い騒動5（後書き）

長らくお待たせしました。

## 陛下のお見合い騒動6

デイリアスは目を覚まし、寝台から起き上がった。隣には、いつもあるはずの温もりも、柔らかさも…ない。

デイリアスは苛立っていた。

なぜ、ユティシアは昨日一緒に寝てくれなかったのか。遠方から久しぶりに帰ってきた夫を労わる様子がまったく見られない。

それどころか、デイリアスが帰ってきてからユティシアの態度は冷たい。

ユティシアが立ててくれた計画とは、一体何なのか。

気になりつつも、デイリアスは、迎えにきてくれるユティシアを待ったのだった。

ユティシアは朝から上機嫌でデイリアスを呼びに行った。

「陛下、おはようございますー！」

「おはよう、ユティシア」

デイリアスはおはようのキスをユティシアにした。

…が、ユティシアはキスを返さず、計画のことで頭がいっぱいになっている。

「さっそく、いきましょうか」

そう言ってデイリアスの手を引っ張り、連れて行くこととする。

デイリアスは不満に思いながらもはりきっているユティシアが可愛

らしく見えて、笑みを浮かべながらついて行く。

デイリアスとはある広い部屋の前に連れて行かれた。

ユティシアの周りには多くの大臣たちがいる。

…何か、嫌な予感がする。

こいつらが関わるとろくなことにはならない。これは、楽しめる計画ではないことが明白だ。

「では、始めましょうか？」

ユティシアがそう言うと、大臣たちが頷いて扉を開けた。

扉の中には、貴族の令嬢たちが大勢いた。

「どうですか？陛下のためにお見合いを用意して差し上げました」

「……………」

ここで、デイリアスの不満が限界まで達する。

「では、ごゆっくりどうぞ」

そう言ってユティシアは扉を閉めてしまった。

ユティシアはお見合いの進行状況が気になりながらも、扉の外でじっと待っていた。

他の大臣たちも気になるようだ。

…しばらくして、デイリアスが扉から出てきた。

「陛下、もうお相手を決められたのですか？」

ユティシアは嬉しそうに聞いたが、ディリアスはいつもの笑みを浮かべてはくれなかった。  
冷たい表情でユティシアを見やる。

「令嬢は帰らせた」

「どうして……………」

ユティシアの質問には答えず、ディリアスは相変わらず冷たい態度を取る。

ユティシアはディリアスが怒っていることを察して、青ざめる。

「ユティシアがそんな風に思っていたなんて、知らなかった」

ディリアスはそのまま立ち去ろうとする。

「陛下、待ってください！」

「ついて来るな」

ユティシアが掴んだ手を振り払い、ディリアスはその場を後にした。

## 陛下のお見合い騒動6（後書き）

遊びで入れたつもり「陛下のお見合い騒動」が予想以上に長くな  
ってしまっているので、ちゃっちやと終わらせたいと思います。

## 陛下のお見合い騒動7

「陛下！」

ユティシアは慌ててディリアスを追いかける。そして、先ほどディリアスが入っていった彼の自室へと足を踏み入れた。

ディリアスは、ユティシアが入って来ても背を向けたままこちらを向かなかった。

「申し訳ありません。陛下を、怒らせるつもりはなくて……」

必死に謝るユティシアを、ディリアスはかわいそうに思った。

「……いや、怒ってはない。ただ、ユティが俺をそんなに思ってくれていないのが悲しくなっただけだ」

「陛下……」

「分かっている。俺の気持ちをいくら押し付けても、ユティが俺を好きにならないことくらい」

ディリアスは額に手を当てて、俯いた。

「それでも、辛いと思ってしまっ。ユティシアは俺が他の女を好きになっても良いと思っっていることが……情けないな」

「そうではないです。私も……辛いのです。私だって、自分だけ陛下に見ていて欲しいと思っます。でも、それは叶わないのです……」

ユティシアは今にも泣き出しそうな、悲痛な顔をしていた。

「私には……陛下のお子は産めませんから……」

「別に俺はそれを強要するつもりはない」

あまりにも辛そうな表情に、ディリアスはユティシアを宥めようと背中を撫でる。

しかし、次にユティシアの口から発せられた言葉は、デイリアスを啞然とさせる。

「そうではなくて。私には、陛下の子を成す能力がない…とえば、分かりますか…？」

子を成す能力がない…？そんな…。

彼女は自分の意志で子を作らないと言っているのではなかった。彼女は、望んでも出来なかったのだ。

彼女は、お見合い計画を実行しようと思った経緯を話してくれた。彼女は子を成せないから、一刻も早く新しい妃を娶るべきだと考えたのだと。辛くても、それが世継ぎを残すため、国のためには必要な判断だと思い、行動したのだ…と。

デイリアスは、ユティシアの話聞いて胸が痛んだ。

「何で…言ってくれなかった」

「まさか、知らないとは思っていませんでした」

ユティシアは、デイリアスが知った上で王妃にしてくれたのかと思っていた。それが違うと分かったのは、最近だった。

「今まで気付いてやれなくてすまない」

「いえ…陛下のせいではありません」

デイリアスは、愛しくて仕方がないその存在を 強く抱きしめた。

## 陛下のお見合い騒動7（後書き）

まさかのシリアス展開来ましたよ。

何がいらぬ話でしょう？何がちゃっちゃんと終わらせてしまおう…  
でしょう？

二人はどうなるんでしょう？

## 陛下のお見合い騒動 8

「ところで、子を成せないというのは、身体に問題があるということか？」

「いいえ。身体には何も問題ありません」

「じゃあ…どういう…」

訳が分からなかった。身体に問題はないと言う。ならば、なぜ子供ができないのか。

「以前、私は魔法などの魔に属するものと魔眼は相容れないものと語りましたよね？」

魔眼の特性を教えてくれた時、確かに話していた。魔眼は、魔法や魔物と相容れないものであると。魔法は、魔眼に反発してしまうのだと。

「まさか…魔力を持つユティシアと魔眼を持つ俺は、相容れないものであると…？」

「魔力を持つだけなら問題ありません。魔眼は魔法を超越する存在です。普通に魔力を持っているだけなら魔眼に力を抑え込まれます。問題は、私が莫大な魔力の持ち主であるということですよ」

「魔眼では、抑えられないということか…？」

「そうです。今までこんなに接触していたのに、何も起こらなかった方が奇跡です。口付けは、問題なかったようですね」

ここまで聞いて、ディリアスは耐え切れなくなった。なぜ、ここまですべて二人を隔てるのかと。そして初めて自分の力を恨んだ。愛する人と自分を隔てる力など、欲しくない。

「何か：方法はないのか？」

「魔眼の力に触れても反発が起こらないくらいに、私の魔力を抑制しなければなりません」

「封印は、出来ないのか？」

「調べていますが、私の魔力を完全に押さえられるほどのものは見つかったことはありません」

「じゃあ、俺の魔眼を封じることとは？」

「それが一番不可能です。魔眼はすべての上に君臨する絶対的な存在です。魔眼と対等の力など、どこにもありません」

ディリアスは心が壊れそうになるが踏みとどまる。本当は壊れてしまっただった。何かにこのやるせない思いをぶつけたかった。でも、一番辛いのは本人であるユティシアだ。自分はしっかりしないとけない。

「それでも、それでも俺はユティを愛している。何か：方法はあるはずだ。俺は諦めないし、もし駄目でも俺はユティを見捨てない」

たとえ二人の間に壁があつたとしても、お互いの気持ちは変わらない。自分がユティシアを愛する気持ちは絶対に変化することはない。

「陛下：ありがとうございます」

「俺たちは夫婦だろう？これからは、隠し事はするな」

「はい……」

ユティシアはディリアスに抱きついた。その顔は、少し穏やかになつていた。

ユティシアの魔力を封じする方法については、今後探すことにした。

妃は、娶る必要はない。  
ディリアスの金の瞳に映るのは、  
たった一人の愛しい存在だけだ  
から。

## 陛下のお見合い騒動 8 (後書き)

この問題は解決するんでしょうかねー？  
とりあえず、次から新しい話に入ります。

## 魔法学校 1

「本当に良いのですか？」

「ああ」

そう言つて、デイリアスはユティシアに数枚の紙を渡す。

その紙には『魔法学校訪問』と書かれてある。

初めて、王妃としての仕事をもらったのだ。

ユティシアの誘拐事件などがあり、周りを警戒していたデイリアスは、なかなかユティシアが王妃として人の前に立つことを許してくれなかった。

「そろそろ良いのではないかと思っていた。最近は貴族も落ち着いてきたしな」

…ユティシアのおかげで。

ユティシアは気付いていないが、貴族たちは先日のお見合い騒動でユティシアに従う存在となっていた。王妃に心酔している貴族たちはもう彼女を利用して、どうしようとは思わないだろう。

「内容は書面の通り、魔法学校の訪問だ。ここなら警備もしっかりしているし、問題ないだろう」

デイリアスの言葉を聞きながら、ユティシアは魔法学校の紹介が書かれた冊子に目を通す。

魔法学校　魔法師を育成するための王立学校で、魔法の才能がありさえすれば身分に関係なく入れるらしい。生徒はだいたい6歳から10代の年齢の者たちらしい。魔法師の数は国内にまだまだ少なく、この学校から巣立って行く生徒たちは国で重宝される存在と

なる。それだけに魔法師の卵たちは大切にされ、学校の警備も厳しいらしい。

「ありがとうございます、陛下!」

ユティシアは嬉しそうに言った。

その笑顔に、ディリアスも嬉しくなる。

正直、安心した。ユティシアはディリアスに子が出来ないことを告白して、精神的に不安定になっているかと思っただが、そんな様子はなさそうだ。

…そうか、王妃になった当初から悩んでいたのに、今さら気にすることもないか。

ずっと悩んできて、夫にも気付いてもらえなくて。そんな辛い状況を乗り越えてきたユティシアにとっては、今さら落ち込む必要がないのかもしれない。

「俺はついて行けないが、ゼイルを護衛として随行させるからな」

「ゼイルどの…ですか？」

「ああ、何か問題でも？」

「正直、アル殿のほうが良いのでは？護衛などの経験を積むことも大事ですし、何よりこの年で異例の出世をしているアル殿は生徒たちの憧れです」

「そうか…それもそうだな…」

ディリアスはしばらく考えて、アルを同行させると言った。

「…俺？」

魔法の訓練をしていたアルは、驚いた様子で言った。

最近ユティシアに指摘された魔法の制御に力を入れているようだ。まだまだ制御は甘いが、徐々にその術は精密なものになってきている。

自分の教え子だけあって、その進歩は嬉しい。

「はい。私が推薦しました」

自分が抜擢された上に、王妃自身が推薦したと聞き、さらに目を丸くする。

「よろしく願いますね、アル殿」  
ユティシアがにっこり笑って言った。

## 魔法学校2

魔法学校に着くと、すぐに子供たちが歓迎してくれた。

ユティシアはその歓迎に笑顔でこたえる。

ユティシアとアルは色々なクラスの魔法の授業を見て回った。

はじめは、一番下の学年の子たちの授業だった。

教室に入ると、アルは子供達から尊敬の眼差しを向けられ、騒がれる。しかし、授業が始まると先生の話に熱心に耳を傾けていた。

「魔法は、とても大きな力です。魔物にも対抗しうる力となります。しかし、それと同時に、人々を傷つける力にもなります」

先生の言葉に、子供たちはうんうんと頷く。

「先生、ほんとに魔物が倒せるのー？」

「ええ、そのような魔法師は数少ないですが、皆さんは“白銀の舞姫”を知っていますか？」

「知ってる。騎士団の中でも称号を持つ凄い人でしょう？」

「そうですね。今はやめられたようですが、皆さんも頑張って、称号を持つ人たちみたいに強くなりましょうね」

ユティシアは複雑な感情だった。

まさか、自分の話が出てくるとは思わなかった。あの頃を懐かしく思うと同時に、自分は魔法師をやめて良かったのかと考えてしまう。自分がやめたせいで、多くの人々が傷ついているのでは…と時折心配になる。

……もう、割り切れていると思ったのに…。

次に、最高学年…いわゆる魔法師の卵、とも言われる学年の授業を見た。

最高学年は色々な年齢の人たちがいた。飛び級で上がった子もいれば、何年も学校に残って魔法研究に貢献している人もいる。

今日は研究の成果を発表する授業だった。ユティシアとアルはわくわくしていた。ここは国内でも魔法研究の最先端に行く場所である。どんな内容が聞けるのかと興味津々である。

「魔法において大切なのは、発想の転換です。魔法の対象をどう認識するかで使える魔法の範囲が広がります」

これを聞いてユティシアとアルは顔を見合わせた。

これは、ユティシアがアルに最初に教えたことである。アルはこれを聞いて、現在自身の魔法に改良を加えようと試行錯誤中だ。

「王妃様ってすごいんだな」

アルは改めてそう思ってしまった。

研究員たちが必死で研究したものを、当然のようにアルに教えたユティシア。彼女の魔法に対する才能は計り知れない。

対するユティシアは、また後悔が駆け巡る。自分ができることがこの魔法という分野には残されていることを改めて知り、魔法師としてきちんと復帰した方が良いのでは…と思ってしまった。

魔法学校に来て、自分のすべきことが何か分からなくなってしまった。今は、王妃という立場にいる自分。魔法師である自分と、どちらの方が出来ることが多いだろうか。

それはもちろん、魔法師としてのほうが多くの人に手が届く。未熟な王妃としてでは、その手はいくら伸ばしても届かない。

そんなことを考えて、ユティシアは首を振った。

今、自分の居場所はデイリアスの隣だ。王妃という立場が、デイリアスの妻という立場が自分の居場所だ。

これから、魔法の面でも貢献できる場所を探していけば良いだけの話だ。

ユティシアは王妃としてさらに頑張ることを決意したのだった。

## 魔法学校2（後書き）

忘れていたかもしれないので補足。

称号とは、騎士団“光の盾”において、各部門で最も優秀な人たちのことです。

ちなみにユティシアは魔物討伐の部門で“狩人”という称号を持っています。

### 魔法学校3

午後からは実技の授業らしく、生徒たちが外の演習場に集まって行く。演習場は主に、中級以上の魔法を扱う者たちが利用するものなので小さな子どもはいない。

演習場には、大きな結界が張られており、万が一生徒の魔法が建物などに当たることがないようにしてある。生徒といってもこの生徒は上級魔法を扱えるものも多い。魔法が暴走すればただではすまないだろう。

ユティシアとアルは演習場に足を踏み入れた。

憧れの魔法師長の存在に気付いた生徒たちはいつせいに群がってくる。

「アル様、魔法を教えてください」

「いえ、ぜひとも私に指導を！」

「僕も、お願いします」

生徒に取り囲まれたアルは困ってユティシアに視線を向けた。

「いいですよ。生徒たちにとってこんな機会は滅多にないのだから、教えてあげてください」

ユティシアがそう言うのと、アルは生徒たちに引っ張られ、どこかに行ってしまった。

「王妃様、危険ですからあまり生徒に近付かないようにして下さいませ」

教師からそう言われ、ユティシアは了承したように微笑んだ。その微笑みに魅了された生徒は数え切れない。

ユティシアは教師に説明を受けながら演習場を見て回る。生徒たちはそれぞれ、自分の好きな魔法を選んで練習している様子だった。教師が生徒を見回り、問題のあるところを指摘していく。

「王妃様、あれが学校で最も優秀とされている生徒です」

教師から紹介された視線の先にいるのは、先ほど難しい顔をして試行錯誤している男子生徒だった。年齢は、ユティシアと同じくらいだろうか。

「王妃様、初めまして」

挨拶はそつけないもので、生徒はすぐに魔法に打ち込む。男子生徒は魔法がうまくいかないらしく、どうにかできないものかと悩んでいるようだった。

「申し訳ありません、礼儀がなっております…」

「いいのです。とても熱心でいらっしやいますね」

ユティシアがそう言うのと教師は、ほっとしたようだった。

ここは王立の学校だ。王妃の機嫌を損ねることがどれだけ最悪の事態を生むか分からない。

…教師も大変だな、とユティシアは思ってしまった。

「魔法が、うまくいかないのですか？」

ユティシアは男子生徒に声をかける。ユティシアは困っている男子生徒を助けてやることにしたのだった。

「はい。できれば、魔法師長にご指導いただきたいのですが…」

教師たちも扱ったことのない魔法で、質問しても首をひねられるだけらしい。魔法は、古い魔法書をあさっていた時に見つけたらしく、教師たちが専門外と言つのも頷ける。

ユティシアはどうしようか迷った。アルは強いが、経験に基づいた知識はあまりない。だが、これも経験のうちだと思いアルに男子生徒を指導させることにした。

## 魔法学校 4

アルを呼び寄せたことで多くの見学者が集まって来た。中には教師の姿も見える。それほど、この魔法指導には興味があるということだろう。

「アル殿、あの魔法のどこに問題があるか分かりますか？」

ユティシアが突然王妃から魔法師の顔になったことに気付कि、アルは驚く。…アルの顔は、すぐに真剣なものへと変わっていった。

アルは生徒の方をじっと見つめる。

彼は、炎の上級魔法を発動させたいようだった。だが、炎が現れるどころか魔法自体が発動しないのだ。魔力がうまく魔法に変換されない。

何が、おかしい？魔法は呪文と陣が完璧であれば、莫大な魔力がなくても発動できる。男子生徒はそのどちらにも悪い所は見られない。魔力が足りないわけでもない。

「何も、悪いところはないようだが…」

アルはお手上げといった様子で、ユティシアに答えを求めた。

ユティシアは苦笑する。

…こんなにあっさりと答えを見つけることを諦められても困るのだが。

「そうですね。確かに今までの過程で悪いところはありません」

「…今まで？」

「実は、呪文が足りないのです。残念ながら、彼が見た書物は間違

っているのではようね」

…まあ、よほど優秀な魔法師なら詠唱を省略しても問題ないかもしれないが。

…言われてみれば、上級の魔法の割には呪文があまりにも短いことに気付く。

呪文は魔法の難易度に比例して長くなっていくものだ。

アルはユティシアの知識量に感心してしまう。4歳しか違わないというのに、この知識の差は何だろう。たとえ自分が16になってもこれだけの知識を得られるとは思えない。

さらには、ユティシアは王妃としても様々な才能を発揮している。異国の言葉も喋れるし、最近ではディリアスの政務も手伝っているのだ。彼女の努力がどれ程のものか計り知れない。

ユティシアはすぐに男子生徒に正しい呪文を教えた。

最初はうまくいかなかったものの、アルの指導もあって炎の魔法は何度か挑戦すると、成功した。

男子生徒は感謝して何度もお礼を言ってきた。

「王妃様は、魔法師のですか？」

教師が驚いたように質問する。

「ええ…元、ですけどね」

「まあ、素晴らしいですわね！」

教師は興奮し始めた。

「そんな、感嘆されるようなことでは…」

「謙遜するなよ。俺の師だろうが」

アルが口にした言葉に、周りにいた者たちは目を見開いて驚いた。

魔法師長の、師。

師となるぐらいだから、彼の能力を超越しているのだろうか。歴代でも十指に入るのではないかと言われるアルの強さである。それを超える彼女の強さはもはや理解できない。

ここからはユティシアも指導側にまわり、的確で分かりやすい指摘を生徒たちにしていった。

王妃は魔法学校でたいそう気に入られ、魔法師長と並んで尊敬の眼差しで見られることとなる。

## 魔法学校 5

実技の授業も終わりに近付いた頃、ユティシアは一部の生徒や教師たちが騒ぎ始めたことに気付く。

「一体どうしたんだ？」

アルも周りの雰囲気がおかしいことに気づいたようだ。

ユティシアとアルは騒ぎの中心に足を速める。

人ごみを掻き分けて行くと、中心には一人の女の子が倒れていた。周りを教師たちが囲んでいる。

「いくら待っても回復しないぞ…ただのめまいではないのか？」

「これは、病気などではないようですが…」

学校に勤務していると思われる医師が少女を診察する。

「身体の方に原因はないようです」

「嘘だろう！？こんなにも苦しんでいるのに」

少女は汗をかいており胸は激しく上下していて苦しそうなのが分かる。

「私、騎士団で聞いたことがあるのですが、これは“魔”ではないかと…」

一人の教師が青ざめながら口にした。

魔。

魔法学校の教師も、言葉だけなら知っている。確か、魔物の念から生まれるもので、人の負の感情を増幅させたりするという。

しかし、他の教師たちは大変な事態だということに気付いていない

ようだった。

「だが、魔は心に影響を及ぼすだけで、人体に害はないはずだ」

「しかし、上級の魔物から生み出された魔は違うようです。子どもは魔に侵されればすぐに倒れてしまうようです」

教師たちはしん、と静まり返る。

…それが本当だとすると、自分たちになす術はない。

魔を浄化できるのは、生まれつき特別な魔法を使える才能を持った者たちだけだ。そういう者たちは、浄化だけでなく治癒魔法なども得意で、魔法師たちの中でもごくわずかしかないらしい。

途方に暮れていると突然、王妃が駆け寄ってきた。その後ろにはアルもいる。

「見せて下さい！」

王妃は突然そう言うと、少女に魔法をかけた。

「可視」

そうすると、少女の周りに黒い霧が現れる。

周りで見っていた者たちは突然現れた黒い霧のようなものにぎよっとする。

「やはり…魔、ですね」

「どうするんだ？浄化か？」

アルが問う。

「はい。それしかないでしょう」

ユティシアは少女に向かって手を振った。

「払え」

ただ一言、そう呟くと、黒いものは消えた。

「この子、魔に魔力も食われているらしいですね。魔力を分けてあげましょう…そうすれば、回復が早いですし」  
ユティシアは少女の手を取ると魔力を注ぎ始める。

「さて…問題は、魔を振りまいている元凶たちですね」  
ユティシアは、空を見上げる。

突然、パリンと何かが割れたような音が響く。  
…魔物の襲撃によって結界が破壊されたらしい。

生徒たちは突然の襲撃者に驚き、逃げ惑う。

「来ましたね。これは…迎え撃つしかなさそうですね」  
ユティシアはアルを見て、にこっと笑った。

その笑みは、彼女がいつも見せる優しい笑みではなく、何とも挑発的な、いつもの大人しい彼女からは想像できないような、強気の笑みだった。

## 魔法学校5（後書き）

さてさて、次はユティシアVS本編に初めて登場？の魔物さんです。

## 魔法学校 6

空を見上げると、鳥のような形状をした魔物が何匹も飛び回っている。しかし、これだけではないはずだ。先ほど結界に穴を開けた上級の魔物がどこかに潜んでいるはずだ。

「王妃様、いけません！逃げてください」  
教師たちは王妃を最優先に守ろうとするが、王妃は取り合わない。

「戦わないで下さい。先ほどあんなにも魔力を消耗されました。これ以上は危険です」  
先ほど、呪文を使わずに上級以上の魔法を2つも使用したのだ。さらには、結構な量の魔力を分け与えてしまっている。普通ならば、魔力はほとんど尽きてしまっているはずだ。

「大丈夫です。魔力の量には自信があります」  
そう言っている間に第一陣が襲い掛かってくる。

正直、身体強化なども使って戦いたいところだが…ドレスでは身体を動かせそうもない。

…仕方がないが、今回は魔法だけで戦おう。

ユティシアは手を振るって、襲ってきた敵をすべて氷で貫いてしまった。他にも小物が残っているが、それは教師たちで十分対処できるだろう。

「さて…大物は、どこでしょうね？」  
ユティシアは神経を研ぎ澄ませます。

…いた。

ユティシアの後方から、気配がした。

ユティシアは振り返って炎を放つが、すんでのところで避けられてしまう。

魔物は空に舞い上がり、もう一度攻撃する機会を狙う。

…私も、まだまだですね。

ユティシアには、魔力の制御が出来ないという最大の欠点がある。今では努力によって人並みにはできるようになってきたが、ユティシアがそんな欠点を持っていながら今まで魔物と渡り合えていたのは、並外れた剣術の腕前のおかげだ。“剣聖”と呼ばれるアストウール仕込みの剣術は、完璧に欠点を補い、ユティシアを何度も救った。

今は、剣術の使用は出来ない。どちらにせよ、今までのように剣に頼るわけにはいかない。王妃となった今、ドレスを身に纏い、優雅な生活をしているユティシアにとって、剣を持てる機会はほとんどない。だからこそ、もっと魔法を鍛える必要がある。

魔物は、もう一度ユティシアめがけて突進してくる。

魔物は明らかにユティシアを狙っている。それは、この中で一番魔力が強いからだろう。魔物にとって、魔力は最もおいしい餌である。…シルフィとアルヴィンがユティシアの魔力を好むように。だから魔物は魔法師を襲いやすいのだ。

そうになると、この学園に来たのも納得がいく。魔力であふれているこの学校は、魔物にとって格好の餌場となるのだろう。

…少し、これからは警備を見直す必要がある。今まで上級の魔物が襲って来なかったのが奇跡だ。

などと考えているうちに、魔物が近付いてくる。

ユティシアは呪文を唱えた。

…できるだけ、繊細に、正確に。

ユティシアが普段戦闘では使わない呪文を言う。これは、魔法の制御をより細かくするためだ。

呪文は、魔法を正確に使ったり、魔力の消費を押さえるために補助する役割を果たす。魔方陣なども同じだ。さらに、杖などを使うとよりその効果が強くなる。

ユティシアは魔法で障壁を築き始める。半球状の障壁が徐々に子供たちを守るように広がっていき、ほぼ全体を覆う　　寸前。

「だめだ、間に合わない！」  
アルが叫ぶ。

唯一障壁のてっぺん部分がまだ開いたままだった。

その穴を狙い、魔物が降下してくる。障壁は、ものすごいスピードで突っ込んでくる魔物を防ぐには、間に合いそうもなかった。

誰もが、もうだめだ　　と思い、諦めるように目を閉じた瞬間。

魔物の、劈くような叫び声が聞こえてきた。

見ると、魔物は障壁の穴にはまったまま、動けなくなっていた。

ユティシアは魔物が飛び込んで来るのを狙って、穴を閉じたのだっ

た。

…本当は、障壁を完成させて魔物の身体を分断しても良かったのだけれど、ね。

敢えて捕獲するだけにとどめたのには意味がある。

「アル殿、今です！魔物を倒してください」

ユティシアが放心状態になっていたアルに言う。

アルはユティシアの声で我に返り、最大限の力で魔法を発動させた。

「行けえ！」

アルの叫びと共に魔法は魔物に直撃し、魔物は跡形もなく消え去った。

## 魔法学校6（後書き）

今回は最強ユティシアさんの戦闘をノーカットで載せてみました。

## 魔法学校7

アルはいまだに先程のことが信じられないでいた。魔物の襲撃もそうだが、最も気になるのは王妃のこと。彼女はあまりにも戦い慣れている。

それに気付いたのは、最後の防壁を築く術。あんな使い方をする者など、あんなに魔法を思うままに操れる者など他に知らない。彼女は魔法を使うということを知り尽くしている。

それは、彼女が実際に魔法を使ってきたから分かっていることなのだろう。

アルが今まで学んでいたのは、彼女の勉強の成果などではない

彼女の実際の戦いで培った経験だったのだ。

今までも彼女が強いということは十分に理解していた。彼女が魔法に自信を持っていることはアルも感じていた。彼女が、魔法以外では見せることのない自信、積極性。それは、度重なる実戦によって裏打ちされたものだったのだ。

彼女は何ものだ？王妃がなぜ、あんなにも戦いに慣れているのか。

アルは冷静さを取り戻せないままユティシアを見つめた。

ユティシアは学校に被害が出ていないことを教師から聞いて、安心

した。この様子では、今日の授業も、ユティシアの参観も中止だろう。

少し、残念だった。もう少し同年代の子たちと話をしたかったのに。

…戦ったなんて言ったら、陛下に怒られるだろうなあ。

王妃は、守られる立場にある。王妃は、傷ついたり、死んだりしてはいけない。人々を統べる者がいなくなると、その下にいるものは簡単に崩れてしまう。

魔法師だった頃より、もつと命を大切にしなければならぬことは理解している。理解していても、それでも身体が反応してしまう。騎士団時代に培った闘争本能は、そう簡単には消えないのかもしれない。

騎士団で働いていた時は、自身は戦うためにあつた。その中で命を落とすこともあるのだろう…とも漠然と考えていた。騎士団の中でも最も危険な任務をこなしていたユティシアは、生きるか死ぬかぎりぎりの厳しい世界の中に身を置きつづけていた。何度も攻撃を受けながら戦い、血を流さないことはなかった。

だが王妃は、そのような浅慮なことをしてはならない。王妃は国民の母であり、簡単に命を投げ出して良い地位ではない。自分には、まだまだ自覚が足りなさすぎる。

教師たちには非常に感謝された。あのような強力な魔物は自分たちだけでは倒すことが出来なかった…と。

だが、ユティシアはその感謝の気持ちをも素直には受け入れることが出来ない。教師たちには止められたのに、魔物の前に飛び出していたのはユティシアだ。

結果としては魔物も退治できて良かったが、王妃が怪我でもしたら

罰せられるのは学校側である。

ユティシアは感謝されて嬉しく思う反面、少し反省しながら魔法学校を後にした。

## 魔法学校7（後書き）

まったく話が進まない。自分の文章力のなさに笑うしかありません。話し変わって、作者は発売初日からドクエ9をずっとしています。パーティのレベルが80を超えている+武器、装備が充実しているにも関わらず、初回クリアに至っておりません。ドクエ8の時は友人に手伝ってもらって何とかクリアしたのですが、ゲームの才能があまりにも無さすぎる自分は、味方を死なせる才能があるようです…。

小説の方ではきつと誰も死なないから大丈夫です。過去、死にすぎますしね…。ユティシア父母やらディリアス父やらマウラさんやら…。

魔法学校編もそろそろ終わりに近付いてきました。この先、どうなるのでしょうか？

ユティシアさんの活躍は間違いなしです！！

## 魔法学校 8

ユティシアとアルは馬車に乗って帰路についていた。

アルは、ユティシアのことが気になって仕方なかった。頭の中をめぐるのは、先ほどの疑問。

ユティシアはそんなアルの視線に気が付かないのか、ずっと外の景色を眺めている。

「……なあ」

アルは決心して彼女に聞いてみることにした。

ユティシアはアルの呼びかけに気づき、ゆっくりとそちらに視線を向ける。

「何でしょう?」

「王妃様は何ものなんだ?」

「何者つて…ただ者ですよ。一応、王妃という地位にいますが」

「お城に籠りつきりだったんだろ?何でそんなに魔法が使えるんだ?」

ユティシアはようやくアルの聞きたいことが分かり、そういうことですか…と呟いた。

「実は……」

ユティシアが口を開いたとたん、馬車に大きな衝撃が走った。

「またですか…これほど多いのはおかしいですね」

馬車の外に出ると、魔物が3体、馬車を取り囲んでいた。御者はどうやら無事のように、がたがた震えながら身を縮めている。

「下級ですね。アル殿、初めての任務が事件続きで申し訳ありませんね」

ユティシアは炎で魔物を焼いて再び馬車に乗り込むと、御者は再び馬車を走らせた。

ユティシアは魔物との遭遇について疑問に思うことがあった。

これほど魔物が出現するのは異常事態だ。デイリアスはこの国には魔物はあまり出ないと言っていた。だが、今日はかなり狭い範囲で二度も遭遇している。

ユティシアが考え込んでいると、アルが興奮して話し掛けてきた。

「なあなあ、さっきの話の続きは？」

…完全に頭から飛んでいた。

ユティシアはすみませんね、と言いながら再び話し始める。

「…アル殿は、“白銀の舞姫”を知っていますか？」

「ああ、騎士団の中で最強の魔法師と謳われた女のことだろ？」

「…あれ、私なのです」

「……………は？」

アルはよほど驚いたようで、少しの間固まっていた。

「それ、陛下は知ってるのか？」

「いえ、陛下は心配なさるので、申し上げていません。内緒にしておいて下さいね」

ユティシアは両手を顔の前で合わせ、可愛らしい仕草でお願いする。

…「じついつの、陛下が見たら喜ぶんだろっつなあ。

年下のアルでも時々ユティシアが可愛いらしく見えてしまうくらい

だ。ユティシアを溺愛するディリアスが見たら一発で陥落するだろう。

アルがそんなことを考えている内にユティシアはまた何事か考え始めた。彼女の表情は真剣そのものだ。

：ユティシアが考えるのはもちろん魔物のこと。

ユティシアは魔物の増加のほかに、最近魔に侵される者が多いことに気付いていた。騎士団に行った時、令嬢に誘拐された時、そして魔法学校でのこと。これらに関連がないはずがない。

“ 黒い霧がかかったように、魔力が見えないのだ ”

ふと、陛下が以前口にした言葉が脳裏に浮かぶ。

魔眼を持つ者だけに見える黒い霧とは                      それが魔物のいない  
ところで見える意味とは                      。

ユティシアはそのすべてを繋ぎ合わせて考えていく。

もしかして                      ！？

自分の予想が正しければ、この国にとんでもない事が起こっている。これは、国の存亡に関わることだ。

一刻も早く城に帰り、調べてみなければならぬ。いや、その前に何らかの策を講じるべきか。

ゆっくりとがたがた揺れながら走っている馬車の中で、ユティシアの気は焦るばかりだった。



## 魔法学校8（後書き）

この国に何が起こっているんでしょっ？

とりあえずユティシアさんの大活躍があることは間違いなしです。

## 魔物の襲来 1

ディリアスはユティシアの帰りを今か今かと待ち望んでいた。

魔法学校が、襲撃されたとの連絡が入りました。

先ほど受け取った報告：それは、ディリアスの心を乱した。幸い、怪我人はいないとのことだったが、ユティシアの無事な姿を見るまでは安心できない。

：アルを、護衛につけたのは間違いだった。もっと信頼できる護衛をつければよかった。

ユティシアに頼み込まれ、安易に了承してしまった自分をディリアスは恨んだ。

「陛下、そろそろユティシア様がお帰りになる頃です」

ローウエにそう伝えられ、ディリアスはユティシアを迎えに行こうと、執務をする手をとめて立ち上がった。

その瞬間、ユティシアが移動魔法でアルと一緒に現れた。

「ユティ！…無事だったか？心配したぞ」

ディリアスはその身体をしっかりと抱きしめた。

「それより陛下、魔物の襲撃についての件ですが…」

そう言っユティシアは自身を抱きしめるディリアスの手を払いのけるようにして魔物の襲撃事件の報告を始めようとする。

「そんなことは後だ。ユティシア、怪我はないか？恐ろしい目にあ

ったのだろうか？」

彼女の行為を不満げに思いながら、デイリアスは質問する。

「私のことは、後回しにして下さい」

「そんなことを言うな。俺がどれだけ心配したか分かっているのか」

「お願いです。国の、存亡に関わることなのです！」

痺れを切らしたユティシアが声を荒げた。

彼女が大声を出したことには驚いたが、ひどく焦っているような彼女の表情を見てデイリアスもただ事ではないと考える。

「どういうことだ…？」

「まだ、確信はしておりません。とりあえず、過去の魔物の発生件数と、最近の魔物の発生場所、そのことに関する報告書を見せて下さい。…あと、犯罪件数や死者数についてもお願いします」

デイリアスは訳も分からないままそれらの資料を引っ張り出した。

「魔物の発生は確かに増えているが…」

「いいえ、それだけではありません。魔物の発生は王都の近くが多いですし、最近犯罪件数も増加しています」

資料を素早く見通していくユティシアは、内容を確認しながら話す。

本当に、ユティシアが何を考えているのか分からないデイリアスは、ローウエとアルに視線を向けるが、二人とも分からないというように首を振った。

「それと陛下…以前、魔眼が黒い霧がかかったように見えないとおっしゃいましたよね。それは、今も変わりませんか？」

ディリアスは即座に魔眼を発動させ、周りを見る。  
…確かに、黒いものが充満しているようだ。

「以前より、霧が濃くなっているようだ。今は、何も見えない…」

「そうですか…やはり…」

一人で納得しているユティシア。

「一体何だというのだ。魔物と、犯罪件数と、魔眼の不調がどう関係がある？」

ディリアスにユティシアが落ち着いて聞いてくださいな、という前置きをして口を開いた。

「この国に魔物が入り込んでいます。それも、最強ランクのもの」

ユティシアの一言で、室内に激震が走った。

## 魔物の襲来1（後書き）

ようやくいい感じに話が進み始めました。

恋愛はまったく進みそうな雰囲気ではないですが…

質問を頂いたのでちょっと、補足。

話の中で、ユティシアさんに関して“白銀の舞姫”という名を出しましたが、あれは称号とかでも何でもなく、騎士団時代の彼女の異名です。

## 魔物の襲来2

「魔物と犯罪数と魔眼がどう関係があるのか…でしたね。最強ランクの魔物は、移動しながら魔を振りまくことができます。陛下の魔眼は魔を黒い霧として捉えるので、現在周りが魔に覆われた状況ではうまく見えないのです」

「不調などではなかったのか…」

「はい。魔物を倒せば解決しますよ」

ユティシアがにこつと笑った。

「魔は、人の身体に侵入し、身体に憑きます。症状として、負の感情が増幅されるので、欲望や恨みの感情に振り回され、罪を犯す者が増えたりするわけです。…騎士団で、暴走した男性がいましたよね？」

部屋に居た皆が頷くが、騎士団での事件はアル一人が知らず、置いてけぼりになっている。

デイリアスが後で教える、と言って話を続けた。

「ああ、覚えている。だが…精神の強いものには効かないのだろう？」

「ええ。しかし…これが一番まずいと思うのですが…女性や子ども、老人などは単純に魔の力に絶えることが出来ずに、倒れてしまうのです」

デイリアスの心は一気に冷える。

先ほど魔眼で見たとき、王都には濃密な魔が広がっていなかったか…？まだそのような報告がないところを見ると、この濃度では問題ないようだが…これから王都中の女性や子どもが倒れてもおかしくない。

「さらに恐ろしいのは、最強ランクの魔物は他の魔物を呼び寄せる力を持っていることです。これから…この国での魔物の被害は手に負えないほど広がっていきます。早く、何かしらの手を打たなければ大変なことになります」

ユティシアは齒噛みした。

…今までなら、普通に気づくことが出来た。被害が広がる前に、魔物を倒すことが出来たのに。

感覚が鈍っているのか？…いや、騎士団“光の盾”も何も気付いていないようだ。専門である彼らが、最強ランクの魔物に気付かないはずがない。

そうすると、今まで魔物の出現を気付かせないような何かがあったのか？

「大変です!!」

一人の侍女が血相を変えて部屋に飛び込んできた。室内の状況を伺わずに部屋に飛び込んできたところを見ると、余程のことなのだろう。

…まさか、魔による被害者が現れ始めたのか？  
皆は嫌な予感がしながら、次の言葉を待つ。

「フィーナ様がお倒れになりました!」

なんと、一人目の魔の被害者はフィーナだった。

## 魔物の襲来2（後書き）

フィーナちゃん、久しぶりに出てきたのにまさかの展開です。もっとまともな登場の仕方、なかったのか？なんて思う方はいるはずです。

たとえば、フィーナちゃんのかわいさが際立つシーンが見たい方とか、フィーナちゃんと両親のらぶらぶなところが見たい方とか。

シルフィとアルヴェインもそろそろ登場させたいですねー。

### 魔物の襲来3

医師や侍女たちがフィーナを見守る中、ユティシアとデイリアスが到着した。

「フィーナ！」

デイリアスは荒い呼吸を繰り返しているフィーナに声をかける。

フィーナはデイリアスに視線だけを向け、かすかに力ない笑みを浮かべた。デイリアスはフィーナの手を強く握る。

「先ほど、急にお倒れになったのです。呼吸が激しく、熱も出ていらつしゃってとても辛そうなのです」

フィーナを診察していた医師が告げる。

「ユティシア、フィーナを治せるか？」

「はい。ですが、フィーナの弱ったままの体では、追い出した途端また魔に憑かれるだけです」

「どうするつもりだ？」

「先に、城全体の浄化を行い、魔の侵入を防ぐ結界を張ります…国の中心であるこの機能が駄目になってしまつてはお終いですし」

国王に仕える者が皆倒れてしまつては国が機能しなくなる。魔によつて弱体化した国が侵攻されかけたことは過去に何度かある。それを防ぐためにも、この城を保護しなければならぬ。

ユティシアは、静かに目を閉じる。

「穢れなき力よ、この地を、清めたまえ…」

その途端、ユティシアから清浄な空気が広がる。邪なものがすべて洗われていくようだった。

魔眼を通して見ていたデイリアスは、彼女の美しい白銀の魔力が魔を祓うのを見た。

「強き守りよ、この地へ入り込む悪しきものを、阻みたまえ…」

彼女の言葉と共に、彼女の結界が張り巡らされていった。

ユティシアが呪文を唱えない代わりに何らかの言葉を発するのは、使う魔法のイメージをより鮮明にするためだ。ユティシアが強固な結界を望むほどに、結界は強くなる。

魔法の行使を終えたユティシアは、目を開いた。

「次は、フィーナちゃんの体内の魔を抜きますね」

ユティシアは優しくフィーナの頭を撫で、頑張ってね、と声をかけた。

フィーナは指一本動かすのも辛い身体で、がんばる、と強い返答をした。

「抜え」

ユティシアはフィーナの前で何かを振り払うような仕草をする。

すると、フィーナの顔色はみるみる良くなり、穏やかな表情に戻った。

「良かった…」

デイリアスは安心したようでしきりにフィーナを抱きしめた。

魔が被われた今はもう、フィーナの体調はだいぶ良くなっていた。

「それにしても、フィーナの魔眼は魔を防げなかったようだな…。それに、シルフィとアルヴィンのおかげで魔物には慣れているかと思っていた」

「彼女の魔眼は、そうは言っても弱いですしね…。それに、最強ランクの魔は強烈ですから防ぐのは難しいかと。あと、使い魔は魔を振りまいたりしないので、耐性を付けることは出来ません」  
陛下くらいの魔眼なら簡単に防げるのでしょうかね、と付け足した。

「それにしても…私の大事な家族に手を出した限りは、もう許せません」

ユティシアは怒っていた。…それはもう、今まで見たことがないくらいに。

「陛下、早く魔物を見つけ出しますよ。ディスタールに手を出したこと、後悔させてやります」

ユティシアは拳を握り締めながら言った。

いつものユティシアの口からは飛び出さないような苛烈な言葉を聞き、デイリアスは目を睜った。

### 魔物の襲来3（後書き）

更新しなくて申し訳ないiiiiiiiiii!

実はこの話、日曜日に仕上がっていたなんて、口が裂けても言えそうにありません。

次は更新早めに見えるように頑張ります。

## 魔物の襲来 4

翌日、ユティシアは貴族たちを集めるようディリアスに頼んだ。貴族たちは、数日でもほとんどが集まった。皆、魔法などを使用して慌てて王都に来たそうだ。

王都の周囲は魔物が多いとあらかじめ言っておいたため、“光の盾”に護衛を頼んで魔物はうまく回避したらしい。

ここに呼んだ目的はもちろん、魔物の情報を聞き出すため。

魔物の発生状況などを見ると、王都内に集中しているのは確かだが、魔物の行方はまったく掴めなかった。ユティシアは魔物が王都の外に住処を持っていて、そこから王都に襲撃に来ているのではないかと推測した。

貴族たちのほかに、ローウェ、ゼイル、アル、さらにはシャラも参加して、おまけにシルフィとアルヴィンがユティシアの足元に座り、緊急会議が始まった。

ユティシアは貴族たちに現在の王都の状況を簡単に説明した上で、それぞれの領地で異常が起こっていないか尋ねた。

魔物による被害は貴族たちの間でも、問題になっていたらしい。しかし、魔物の出現は何人かから聞いても、魔に憑かれた者がいるという報告はなかった。

「あの…関係があるかどうかは分かりませんが、ある村で伝染病のようなものが流行っております…。女子供が次々と倒れ、目を覚

まさないそうです」

一人の貴族が、そう発言した。彼は王都の近くに領地をもっている者だった。

彼の報告によると、一ヶ月ほど前から病が流行り始めたが、治療法が見つからず為す術もないために放っておかれ、誰もその村には近付かなくなっているという。

ユティシアはその村の位置を地図で確認した。

「なるほど、ここからなら王都に来るのは容易いですね。それに、病気の症状も魔に憑かれた時の症状と一致しています」

「そうだな。そこが有力候補だな」

「それで、陛下…私はそこへ行ってみたいと考えているのですが、お許し頂けないでしょうか？」

ユティシアの発言に全員が目を剥いた。

「駄目に決まっているだろう！魔物に殺されるかもしれないんだぞ！？それに、本当に伝染病だったら移るかもしれない」

「私は、魔を祓うことが出来ます。ですが、早く行かないと手遅れになるかもしれないのです」

「王妃様、どんな理由があろうと、御身を危険に晒すようなことだけはおやめ下さい」

ローウエが必死に説得したが、ユティシアは譲らなかつた。

ついにユティシアの熱意に折れたデイリアスが口を開いた。

「…分かった、だが、俺もついて行くぞ。ゼイルも、護衛として連れて行く」

「王都の方が手薄になってしまいますよ。国王が留守にするのはまづいかと…」

「政治の方は、ローウェと母上が残っていれば、問題ない」  
「そうですね…。では留守の間、アルとシルフィはシャラ様とフィ  
ーナの護衛をお願いします…。シルフィは王城全体の守りも兼ねて」  
現地にはユティシアとアルヴィン、デイリアス、ゼイルが向かうこ  
ととなった。魔に憑かれる可能性があるということで、他の者は連  
れて行かなかった。

## 魔物の襲来 5

「では、行って参ります」

ユティシアたちは城の前でローウェ、シャラ、フィーナに見送りをしてもらった。皆、心配そうな面持ちでこちらを見ている。

「気をつけてくるのよ。政治の方はこちらに任せて。王都内での魔の被害者はこちらで対処しておくからね」

シャラ様はフィーナを抱っこしながら言った。

「迷惑をかけます、母上。絶対、無事で帰ります」

「頑張つて来てね？」

シャラ様はディリアスの頭を撫でた。

「きっと彼女にとって、何歳になってもディリアスは息子に変わらないのだろう。」

「おかあさま、ずっと会えないの？」

フィーナが不安そうに問いかけてきた。

「彼女は、漠然とだが周りの雰囲気から何か感じ取っているようだ。その瞳は頼りなく揺れて今にも泣きだしそうな顔をしていた。」

「大丈夫、すぐに帰ってくるよと約束するから、ね？」

ユティシアは安心させようとフィーナの頭を撫でる。

「おい、そろそろ出発すんぞー！」

馬車に乗っているゼイルから声がかかる。

村には馬車で向かうようだ。魔の蔓延している場所に御者を連れて行くわけには行かないので、ゼイルとディリアスが交代で御者をす

るらしい。

「ユティ、行こうか」

デイリアスはユティシアの手を引いて、馬車に乗り込んだ。

揺れる馬車の中から問題の村の方角を見ると、どんどん魔の気配が濃くなっているのが分かった。

「これはやはり、魔の影響と見て正解ですね」

ユティシアは隣に大人しく座っているアルヴィンを撫でながら言った。

「ああ、そのようだな」

デイリアスは魔眼を発動させて答えた。濃すぎる魔のせいで、辺りが暗く見える。

「ところで、ユティ。…その、手元の大剣は何だ？」

ユティシアの手に抱えられている大剣を見て、デイリアスは尋ねた。

「護身用です。だって、魔物に遭遇したら困るではないですか」

「魔法を使えばいいだろう。魔法師なのだから」

「そうですね…」

魔法を使っても倒せないこともない。しかし、制御しきれない魔法はどうしても剣より確実性に欠けてしまうのだ。それに、敵は最強ランクの魔物だ。

最強ランクの魔物は恐ろしい。彼らはどんな能力を持っているのかすら分らない。

上級までの魔物は、炎、水など自分の持つ属性の攻撃や、物理攻撃ぐらいしかしてこない。しかし、最強ランクの魔物となると奇怪な進化を遂げているものが多い。新しい魔物を次々に生み出す能力を持っている。相手の能力をコピーできたりするものもいる。

騎士団でも最強ランクの魔物を討伐できる、“狩人”の称号を持つ者が少ない理由はそこにある。最強ランクは、上級を隔絶した圧倒的な強さを持っているからだ。

絶対に、油断などできるはずもなかった。

## 魔物の襲来5（後書き）

更新が遅くなってすみません。

しかし、受験生なので勉強の方を頑張らないといけないんです！  
これから更新が遅くなっていくかもしれないですが、大目に見てください。

## 魔物の襲来6

「ゼイル、そろそろ交代しよう」  
デイリアスが御者の交代を申し出た。

「ありがとよ、俺はユティシアちゃんと二人っきりで癒されてくるわ」  
そう言っていていそいそと馬車の中に入ってきた。  
ちなみにデイリアスはキレかけている。

「おーひ様、いっぱいお話しようか」  
ゼイルがユティシアの手を取りながら言った。

ユティシアがはい、と返事をしようとした時…

「ユティ、こつちへおいで」

デイリアスが自分の隣をぽんぽんと叩いた。

「?…はい、喜んで」  
なぜ呼ばれたのか分からなかったが、ユティシアはデイリアスの隣に座った。

デイリアスは少し距離を置いて座ったユティシアを自分の方へ引き寄せた。

ユティシアはにっこり微笑んで、デイリアスにぴったり寄り添い、彼の肩に寄りかかった。

ユティシアはデイリアスの横顔を見つめた。

「陛下って、整った顔をしていますよね？早くに結婚されていますが、女性には好かれたのでしょうか？」

「……っ！」

…あぶない、危つく馬を暴走させるところだった。  
二人には甘い雰囲気は漂っていたのだが、ユティシアは自らそれを壊してしまった。

「へーかはね、それはそれはご婦人方の人気が高かったんだよね？マウラちゃんとユティシアちゃんがいる時も、側室にしてくれて夜這いしてくる人もいたからね。」

「ゼイルっ！そんなことは語らなくていい！」  
聞き耳を立てていたゼイルの言葉に、ディリアスは焦った表情で答えた。

「へえ、そうなのですか。やはり陛下は素敵ですからね、そんな気がしておりました」

きらきらと目を輝かせながらこちらを見つめてくるユティシアにディリアスは溜め息をついた。

普通の女ならば、夫の女性関係など聞きたくもないだろうに…ユティシアはどこが変わっている。  
いつになったら自分を意識してくれるのやら…

そんなことを考えていると…

「危ない、陛下！」

ユティシアがいきなりディリアスの身体を倒した。

すると、先ほどまでディリアスの頭があった場所を小さな黒いものが通り過ぎていった。

体を起こすと、ユティシアの額に血が垂れていた。馬は、ユティシアがあぐまく止めたようで、馬車が暴走することはなかった。

「ユティ、大丈夫か？」

「はい、これくらい、たいしたことではありません」  
そう言って、魔法で傷を消した。

傷を消せるから問題ないというが、傷を負うこと自体が問題なのだが…

そんなディリアスの心の声は、届かない。

ユティシアの膝には、獲物を捕らえたアルヴィンの姿があった。  
案の定、先ほどディリアスを狙ったのは魔物だった。

「体は小さいですが、中級クラスですね。これから、村に近付くにつれて、さらに多くの魔物がいるはずですよ。気を引き締めていきましょっ」

そう言ってユティシアは魔の漂う村の方を見つめた。

## 魔物の襲来6（後書き）

ごめんなさい！

忙しくて当分話を進められそうもないので、  
作者は愚かな時間稼ぎ  
を行っております！！

## 魔物の襲来7（前書き）

さすがにずっと待たせるのは悪いので、携帯から何時間もかけて投稿してみました。

脱線しかけた話を軽く強引に本筋に戻したいとおもいます。

## 魔物の襲来 7

その後、何度か下級もしくは中級の魔物に襲われたが、三人と一匹が剣や魔法などで退けつつ村に到着した。

ようやく着いた村は全体が魔に覆われ、酷い有り様だった。こちらまで魔に呑み込まれそうな、そんな気さえしてくる。

「これは、酷いですね…」

ほとんどの住人が魔に憑かれ、臥せっていた。ユティシアは人々に浄化魔法を施して言った。

他にも村の様子を見てまわったが、魔にやられた村はまったく機能していなかった。魔物に破壊されたのか多くの建物が倒壊していたり、畑も荒れていたりして復興には時間がかかりそうだった。

「ユティシアの予想は当たっていたな…騎士団を要請するしかないようだ」

「そうですね。さすがに、国の機関だけでは対応しきれそうにありませんから」

三人は騎士団に向かった。

「何？“狩人”がいないだと？」

苛立ちを隠せないように、受付のカウンターを叩きながらディリア

スが言った。

ここは騎士団支部の受け付け。デイリアスは討伐依頼をしようと受付に申し込みをしていたところだった。

魔物の、それも最強ランクの討伐には莫大な依頼料がいる。

しかしながら正直、国のお金がどうのこうのと言っている場合ではない。国が崩壊しかねないとまで言われる最強ランクの魔物が登場しているにもかかわらず、一つの村以外に被害が出ていない今の状況はむしろ幸運と言えた。お金はいくらでも出すから被害が拡大する前に魔物をどうにかして欲しい…それがデイリアスの望みだった。

「すみませんね〜。 “白銀の舞姫” は辞めてしまいました」

受付員は悪びれる様子もなく返答する。

「剣聖アストウールは？」

「行方不明です」

尋ねたユティシアに予想通りの答えが返ってくる。

ユティシアはがっくりと膝を落とした。

…やっぱりか。

アストウールの放浪癖は変わっていないかった。ユティシアが彼に師事した当初は仕事をいくつかこなしていたが、ユティシアが一人前になってからはほとんど仕事をしなくなった。さらにはユティシアががむしゃらに仕事をこなすようになり、ユティシアに仕事を奪われたアストウールが活躍する場は完全になくなっていった。

すべての民の平和を守る騎士団“光の盾”が、困っている民を、し

かも多くの命が危機に晒されている状況において見捨てることは絶対でない。

しかし、今回ばかりはどうしようもないのだ。実力が及ばないのに、最強クラスの魔物は倒しに行くことは無駄死にしに行くようなものだ。騎士団に所属する上級の騎士でも最強ランクの魔物を足止めすることさえできないのだから。騎士団のなかでも“狩人”はそれだけ貴重な存在だ。

交渉の結果、狩人が到着するまで、取り敢えず村の人々の救出のため的人员は派遣して貰えることになった。

村に戻った三人は、魔物を倒しながら、救出の手助けをしてくれる騎士団の到着を待っていた。

「それにしても、すごい魔の濃度だねえ。こんなのがいつも見えるへーかは気が滅入っちゃうねー」  
ゼイルが感心しながらいう。

「ゼイルにも、見えるのか？」  
ディリアスが驚いて問う。

「普通に見えるよねー、ユティシアちゃん？」  
「ええ、あまりにも強すぎる魔は、普通の人にも見えるのですよ  
こんな風に」

ユティシアの体から銀色の魔力がほとばしり、ユティシアの髪は激しく揺れた。魔力は銀色の炎のごとくゆらゆらと揺らめいてユティシアの身体を包んでいる。

その隣ではいつの間にかアルヴィンが臨戦態勢を取っていた。その小さな体からもユティシア同様、可視出来るほどの力がほとばしっている。

デリアスとゼイルははっとしてアルヴィンの視線の先を見やるとその眼前にはいつの間にか巨大な体躯をした真っ黒な魔物の姿があった。

あまりにもおぞましい姿に戦慄してしまう。この魔物には敵わないと、分かるのだ。本能が、そう告げるのだ。

魔物は咆哮を上げ、ゆっくりと獲物の方へ視線を向けた。その視線のもとでは、人はあまりにも無力だった。

デリアスとゼイルは、魔物との初戦闘にして想像を絶する力と対峙することとなった。

二人は身を守るため剣の柄に手をかけつつも…無意識に一步、足を引いた。

魔物の襲来8（前書き）

今回もケータイからです。

## 魔物の襲来 8

ディリアスとゼイルが一步足を引いた瞬間、魔物が二人に襲いかかろうとした。

しかし、寸でのところでユティシアが召喚した大剣で魔物の攻撃を受け止めた。

さらに魔物の動きが止まった隙について、アルヴィンが尻尾を鞭のように使い、魔物をふっ飛ばした。

「陛下、魔眼を使って下さい！」

ユティシアの指示に従い、ディリアスは即座に魔眼を解放させた。それによって、より濃密な霧が現れ自分の周りを取り囲んでいく。しかし、先程までの、足がすくむような感覚は消えた。

魔眼の気配が、自分の周囲の魔を抑え込んでいるのが分かった。

未だ魔眼が覚醒していないとはいえ、魔眼の力は強大な力を持つようだ。…完全に覚醒すれば、魔を圧倒することが出来るのだろう。

隣のゼイルを見ると、魔眼の効果によって彼も魔の恐怖から解放されているようだった。

「さてと…反撃を開始しますか」

ゼイルがにやりと笑い、ディリアスに目配せした。

ゼイルが魔法で魔物の視界を遮ると、ディリアスは剣を抜いて魔物に切りかかった。

「陛下、いけません！」

ユティシアが叫んだが、ディリアスは構わず魔物に突っ込んだ。

ユティシアは身体強化の魔法を使い、ディリアスを助けるべく彼と魔物の間に身体を滑り込ませようとしたが、間に合わなかった。

「くっ」

「陛下！」

ディリアスの呻きにユティシアは悲鳴を上げた。

ディリアスは腹部を刺され、大量に出血していた。

目を見開いたまま膝について地面に伏した。

先程、何が起こったのか、見えなかった。…腹部に走った痛みで漸く理解できたのだ…自分は魔物に攻撃されたのだ、と。

これ程までに魔物と自分の間には実力差があるというのか。

「陛下、大丈夫ですか？」

ユティシアがディリアスの元へ駆け寄り、治癒魔法をかけた。

いつもと違い、魔力の消費を抑えるため徐々に治癒していく方法を選んだので、完全に回復するまでには時間がかかるだろう。

「ゼイル殿は、陛下を守っていて下さい」

「ユティシアちゃんはどこの？もしかして、戦うつもり？」

「…このままでは、大切な人を守れません。私は、何も、失いたく

ないですから」

ユティシアの瞳には強い光が宿っていた。

「アルヴィン、行きますよ。これ以上魔物の好きにはさせません」  
ユティシアは不敵な笑みを浮かべ、美しい動作で剣を構えた。

アルヴィンがユティシアに答えるように尾を揺らした、その次の瞬間  
二つの姿は消えた。

## 登場人物紹介（前書き）

そろそろお知らせを消そうと思ひ、少しの間代わりに載せておきます。

## 登場人物紹介

\*ユティシア・ディスタール（16）

髪：銀 瞳：水色

職業：王妃 能力：魔法/剣

小国ティシャルの元王女。当初は側室として迎えられたが、現在は王妃として奮闘中。庇護欲をそそられる見た目とは裏腹に驚くほどの才媛で基本的には万能。彼女の戦闘能力についてはまだまだ秘密の部分が多い。

\*シア

髪：灰色 瞳：水色

職業：魔法師

騎士団での登録上の職業は魔法師だが、剣も師匠アストゥールには及ばないものの卓越した技術を持つ。“白銀の舞姫”という異名を持ち、大陸中に名が知れるほどの実力者。師匠のアストゥール同様、騎士団で最も獲得が難しいと言われる“狩人”の称号を持っている。

\*ディリアス・ディスタール（21）

髪：茶色 瞳：金

職業：国王 能力：剣/魔眼

大国ディスタールの国王。若くして国王に即位し、大国を治めてきた。容姿、権力、金、才能全てを持っているため、女性に言い寄られることも多い。が本人はユティシア一筋。他国には剣術に優れていることで有名で、“剣王”と呼ばれている。ディスタール王家に伝わる能力“魔眼”をもっている。

\*ゼイル

職業：騎士団長 能力：剣/魔法

ディリアスの幼馴染。軽い口調と暢気な雰囲気は敵を作りにくい。

有力な魔法師一族の出身で魔法も使える。

\*ローウエ

職業：宰相

デイリアスの幼馴染。穏やかな性格。

\*アル（12）

職業：魔法師長 能力：魔法

ゼイルの親戚。デイリアスからの要請で一族から派遣された少年。

一族の中では技術は長老に及ばないものの、魔力と潜在能力は最強。  
現在ユティシアに弟子入り中。

\*ファイナ・デイスタール

髪：茶色 瞳：薄く金の混じった緑

職業：王女 能力：魔眼

デイリアスと前王妃の間の子。前王妃の美しい容姿と聡明さを受け継ぎ、幼いながらも周りからの期待は大きい。城では侍女たちのアイドル的存在。魔眼の能力をわずかに持っている。

\*シャラ・デイスタール

髪：茶 瞳：銀

圧倒的な政治能力と地位を利用し、前国王を助け国を変えていったと言われる実力者。即位後のデイリアスを支えた。王妃時代に得た人脈は幅広く、現在もその発言力は大きい。今は城で気ままに生活をしているが、有事の際にはデイリアスたちに手を貸す。

\*シルフィノアルヴィン

毛：金（長毛） 瞳：緑 / 毛：黒（短毛） 瞳：蒼

ユティシアの使い魔。最強ランクの魔物に匹敵するほどの力を持つ。

\*リーゼ

ディリアスの唯一の専属侍女。常に冷静な美人。とても優秀。

\*ミーファ

職業：王妃専属侍女

ユティシアの唯一の専属の侍女で、ローウェの妹。常に明るくテンションが高い。ユティシアを尊敬している。

\*マウラ・ディスタール

前王妃でフィーナの母。護衛官への愛情を捨てられないことに苦しみ、心の病気を患って命を落とした。

\*アストウール

職業：剣士 能力：剣

身体能力のみで最強ランクの魔物と渡り合う人物。騎士団で多くの称号を持っており、ユティシアの剣の師匠。“剣聖”と呼ばれているが、ユティシアからしてみれば放浪と浪費という悪癖を持つ性格に問題アリの人物。

名前も出てきてない人たち

\*ティシャル国王

ユティシアの父で、国内では賢君といわれ国民に慕われていた王。ユティシアを愛するが故に遠ざけていた。国民の反乱が起きた際に処刑され、亡くなった。

\*ティシャル国王妃

ユティシアの母。国王とは仲の良い夫婦だった。良き王妃だったが、

彼女の出自に関しては誰も知らない。魔法が得意で先読みの能力を持っていた。国王と共に反乱の時に処刑される。

\*ティシャルル国王太子

ユティシアの兄。唯一ユティシアに優しく接した人。

\*ディスタール前国王

ディリアスの父。国を変えるべく前王妃シャラと共に改革を行った。

## 登場人物紹介（後書き）

書かれていない情報に関しては、作者の記憶が曖昧なため書けないだけです。載せ忘れている訳ではありません。非常に申し訳ありません。

## 魔物の襲来 9

ゼイルはデイリアスの側に付き添いながら、戦いを見ていた。

突然消えたと思ったユティシアとアルヴィンはいつの間にか魔物の近くに移動し、攻撃を開始していた。二人はすぐに魔物を圧倒し始め、その戦いぶりは見事なものだった。

アルヴィンがその素早さで魔物の攻撃をうまく避けながら注意を引き付け、ユティシアの剣が魔物を切り裂く。

アルヴィンの攻撃は俊敏で苛烈。

一方、ユティシアの攻撃は美しく、流れるようだ。

彼女たちの織り成す戦いは、まるで優れた芸術作品の様だった。

ゼイルとデイリアスはその美しい光景から目が離せなくなっていた。ただ単純に強さに感嘆した訳ではない。彼女の動作の一つ一つから感じられる、何者にも侵しがたい美しさ。それは、神秘的ですらあった。

彼女が駆け巡る戦場の空気は、彼女の研ぎ澄まされた雰囲気によって、血生臭い戦いをしているとは思えないほど清廉に感じる…それこそ、神域に足を踏み入れたかのような。

二人の息の合った無駄のない戦いは、徐々に魔物を追い詰めていった。

「ユティシアちゃん、戦い慣れてんね〜」

ゼイルは目の前の光景が信じられず、見当違いの感想を述べた。

「白銀の舞姫……」

突然、怪我で喋る余裕もなかった筈のデイリアスが呟いた。

「聞いたことがある……。かの者の戦いは舞姫の如く美しいものだ……」

華麗に舞う剣は、見る者の心を奪ってしまうのだ……と。

黒い魔の霧の中で銀の魔力を纏い優雅に舞う彼女の姿は 闇に咲く一輪の華のようだった。

誰も払えなかった闇をいとも簡単に打ち負かしたその姿は、気高く、まさに高嶺の存在。

デイリアスは初めて彼女の存在が今までよりずっと遠くに、本当に手の届かない場所に行ったかのように思えた。彼女に近付けたと思ったのは、何だったのだろうか。

自分の無力さに苛立つより先に、最強と呼ばれる魔物をいとも簡単に倒したその強さに、畏怖の念を抱いた。

「それにしても……白銀の雪姫に、白銀の舞姫……か。似たような名をつけられるな」

「何で今まで気がつかなかったんだらうね？」  
ゼイルが不思議そうにする。

「だが どちらの名も……ユティシアらしいな」

デイリアスはふ、と笑った。

ユティシアはユティシアだ。彼女自身に変わり無い。

自分が、一生涯愛すと決めた、望んで止まない存在に。

## 魔物の襲来10

魔物は徐々に弱り、ついにアルヴィンの攻撃によって体勢を崩した魔物に、ユティシアがとどめをさす。

ユティシアは大剣を振り上げて跳躍し、空中に作った不可視の壁を蹴って勢いをつけて、魔物の胸に炎を纏ったそれを突き立てた。

その瞬間、ユティシアに貫かれた剣の傷跡から銀色の光があふれ出し、魔物の体は銀の魔力に包まれて砂山が崩れるかのように消え去った。

一つの命が消える様すら、美しくて幻想的なものだった。彼女の舞台上に幕を下ろすのに相応しい演出だとさえ感じてしまう…そのくらい、美しかった。

ユティシアは魔法で剣の表面の魔を払い、鞘に戻した。

…良かった、陛下が無事で。

王妃として軽はずみな行動をとってはいけないと分かっているから、最初は騎士団に力を借りることを決めた。

だから、突然の魔物の襲撃があっても、戦う決断ができずに中途半端に剣を振るうことしか出来なかった。

幸い、最強クラスの魔物といっても、まだ最強クラスになりたてでユティシアなら簡単に倒せる程度だった。

その、迷いと油断が陛下を傷つける羽目になってしまった。

しかし、陛下を攻撃された瞬間、頭に血が上り何も考えられなくなってしまう。大切なものを傷つけられたから。

今までは、何かから逃れるために魔物と戦ってきた。剣を振るう間は、自分を苦しめるすべてのものから解放された気がしたから。騎士団に所属しているからには人を守る役目を負っていたわけだが、ユティシアは…誰かを守るため、なんて考えたこともなかった。そのたびに自分は何て冷たい人間なのだろう、と思った。

だが、今初めて誰かを守れて嬉しいと感じた。

それは、失うのが怖かったからかもしれない…やっと手に入れた繋がりだから。それでも、ユティシアは嬉しかったし、自分の、誰かを守るだけの力に初めて感謝した。

「ユティシア！」

怪我から回復したディリアスはユティシアに駆け寄り、強く抱きしめた。

「良かった、無事で。助けてくれたこと、感謝している」

それだけ言うとディリアスは、貧血と安心のせいで彼女を腕に閉じ込めたまま力が抜けてしまった。

「陛下っ…」

ユティシアは慌ててその体を受け止めたが、ディリアスの長身を支えられずに地面に膝をついた。

ユティシアはディリアスの温もりを感じて、思わず笑みをこぼした。

「救援連れてきたわよ」

三人は遠くから聞こえてきた暢気な声に振り向く。

…そこに立っていたのは、騎士団本部の受付嬢リンだった。周りの騎士たちが魔物を薙ぎ払いながらこちらに向かってきた。良く見るとその中には上級の腕前の騎士たちが何人もいた。

リンによると、最強ランクの魔物が現れたと聞きつけ、すぐに騎士団員を集めるだけ集めてやってきたそうだ。

「あら、シアちゃんじゃない。もしかして魔物、倒しちゃった？」

「はい、あとは浄化と上級以下の魔物の殲滅ですね」

「お疲れ様、あとは私に任せて？」

リンはにこっと笑ってユティシアに向かってウィンクをした。

「救援の派遣、感謝します、リン殿」

「あら、国王陛下直々にこちらへ？」

「彼女を一人で行かせたくなくて…」

「シアちゃん、強かったでしょ？…あなたが必要ないってくらい」

「ええ…彼女を守る必要などないと身にしみて分かりました」

リンはそれに微笑んだ。

「でも…それでも心配せずにはいられないのですよ」

ディリアスはそう言って、ユティシアを後ろから抱き込み腕の中に閉じ込めた。

「たとえば、愛しい人がかの“白銀の舞姫”だったとしても」

ユティシアは驚いた様子でディリアスを振り返った。

「陛下…」

「どうして黙ってたんだ？」

「それは…陛下が心配するので…」  
ユティシアはディリアスの胸に顔を隠すように俯いた。

「ほう、自覚していてあんなことをしたのか。城に帰ったら、覚悟しておくんだな」

ユティシアは城に帰ってからのことを想像して身を震わせた。

それからユティシア達は騎士団と協力し、村の復興のために動き出した。

## 新たな襲撃者1

騎士団の行動力とリンの指揮のおかげで復興作業はすぐに取り掛かれ、順調に進んでいった。先ほどは、多くの村人の命も助けられたとの報告があった。

「陛下、私少しあちらの方も見て参りますね」

「ああ、気をつけて行って来い」

ディリアスはユティシアの頭を撫でて言った。

ユティシアはディリアスの視界から自分が消えたことを確認すると、人気のない森の方へ向かって歩いて行った。

するとそこにはおかしな模様の描かれた灰色のマントを身に纏っている一人の男が立っていた。

「また、我らが主の邪魔をしてくれたな、貴女は」

「やはり、貴方たちが関わっていましたか」

ユティシアは男に鋭い視線を向ける。

「まったく、主の野望は毎度毎度あなたによって阻まれる」

男は困ったように呟いた。

「だが、今回はこれで終わりだと思っな。今回はとびきりの舞台を用意して差し上げた。貴女は、どうする？」

男は口の端を吊り上げ、にやりと笑った。

今頃、王都では何が起こっているだろうか？

男はそう言い残し、消えた。

ユティシアは慌てて森を抜けて皆のところへ戻った。

「ユティシア、どこに行つてたんだ？心配したぞ」

「それどころではないのです。今すぐ、王都に戻りましょう、陛下」

「ちよつと、落ち着け。いったい何が…」

その時、王都からゼイルの部下がシャラとローウエの命でやってきた。

「た、大変でございます。王都に、敵が攻め込んできております。

シャラ様が、今すぐお戻りになるように…」と

「敵の数は？」

「約一万ほどです」

その数を聞いた途端ディリアスは目を見開いたが、すぐに冷静さを取り戻した。

「ユティシア、ゼイル、帰るぞ」

「ああ。アルヴィンは、どうする？」

ゼイルがいつもとは違う真剣な表情で、ディリアスに視線を向けた。

アルヴィンは戦力として手放せないとこころだが、ユティシアの話によるとアルヴィンは人を傷つけないようにしつけられている。連れで行ったところで、アルヴィンは人を攻撃できないだろうし、ユテ

イシアが絶対に対人戦には手を出させないだろう。

「アルヴィンはこのまま魔物の駆除のためにこちらに残しておく。リン殿、こちらの復興はすべて任せた」

「分かったから、急いでいるなら早く行きなさい」

デイリアスは頷くとユティシアに目を向ける。

「ユティシア、魔力はあとのくらい残っている？」

「まだ、全然大丈夫ですよ。3日以上戦い続けることもあるのですから」

ユティシアはにこりと笑った。

本来なら、最強ランクの魔物は今回の魔物よりも強い。何日も魔法を使いながら戦い続けることもあるのだから、それと比べれば今回の消費魔力はとも少ない。上級ランクから上がったばかりの魔物は、ユティシア相手にはあまりにも弱すぎた。

「だが、今回は戦う前にも魔力を消費しているだろう」

浄化や結界を張る魔法は、大量の魔力を使ったのではないか…デイリアスはそう考えると、ユティシアにはこれ以上魔法を使わせる訳にはいかないと考えていたのだが…。

「大丈夫です。だから早く行きますよ」

ユティシアはデイリアスの心配をよそにさっさと呪文を唱えると、転移魔法を発動させた。

転移した先は、王都の広場だった。敵はもう、すぐそこに迫ってきていた。

そこで、敵のリーダーとしていたのは。

「元、魔法師長と騎士団長…か」  
デイリアスが呟いた。

「お久しぶりですな、陛下…と王妃様？」  
魔法師長が口端を吊り上げ、にやりと笑みを浮かべた。

ユティシアたちの目の前には、新たな敵が立ちはだかっていた。

## 新たな襲撃者2（前書き）

お久しぶりです。

身内の危篤…ということとで気を遣って感想・コメント等控えて下さった方、ありがとうございます。

色々ありましたが作者は復活しましたので、これからもよろしくお願ひします。

## 新たな襲撃者2

「なぜ、王都に攻め込むような真似を…」

いくらユティシアを蔑ろにした者たちとは言え、王都に攻め込むことの意味は分かっているはずだ。

「陛下が悪いのですよ。私たちに兵を集めるだけの時間を下さった、貴方が」

魔法師は杖の先をディリアスに向けた。

「まあ、いいです。貴方たちはすぐに死んでもらいますから、事情を話してもいいでしょう」

魔法師は、自信たっぷりに進み出て語り始めた。

「実は、とあるお方が私たちを拾って下さったのです。その方は、兵を貸すからディスタール王国を潰して来い…と言われました。そのかわり、征服した王国の統治権は私たちに譲っていただけるそうです。利害が一致しましたので、協力することになりました」

「あるお方…とは？」

「さあね、私もよくは知りません。ただ、莫大な魔力を身に宿した方だった。あの方こそ、わが主に相応しい」

魔法師は恍惚とした表情で語り、元騎士団長もそれに対し頷く。

「お前たち、一応勧告しておく。今すぐ、武器を捨てて投降せよ」

「陛下、あまり私たちをなめていると、痛い目にあいますよ。こちらの軍勢は一万。貴方は投降を命じられる立場でしょうか？」

「うちの騎士団はお前たちが抜けてから実力を上げた…信じられないくらいにな」

「はっ…まさか、勝てるとお思いで？」

「大陸一の国防を誇る、ディスタール王国の力を見せてやるのか？」

「こちらこそ、お相手して差し上げますよ」

元騎士団長が剣を振り上げ、兵を動かそうとしたとき

「ユティ、今だっ！！」

ディリアスの声と共に、ユティシアはぱちんと指を鳴らした。

その音は、静寂の中遙か遠くまで響き渡った。

「な…んだと!？」

ユティシアが指を鳴らした瞬間、次々と兵が倒れていく。ドミノのように倒れていった兵は、だれ一人目を開けようとしなかった。

一万の軍勢は、ユティシアの魔法ひとつで眠りについてしまった。

「おっまたせ、陛下」

ディリアスが振り向くと、そこにいたのは大勢の騎士達を従えたゼイルだった。

実は、最初の転移魔法でゼイルだけ城に飛ばしていたのだ。ディリアスが会話によって時間稼ぎをしている間にゼイルは騎士を集め、駆け付けたというわけだ。

「お前たちの駒はすべて使えなくなった。そのうえ、こちらの味方

はたくさんいる。さあ、どうする？」

ディリアスは敵に勝ち誇ったように笑みを浮かべた。

一万の軍勢はほぼ戦闘不能、かろうじてユティシアの魔法を逃れた者も、不意を突かれたせいで出鼻をくじかれる結果となり、戦意を喪失していた

ディリアスの作戦によってユティシア達は形勢逆転に至ったのだっ  
た。

新たな襲撃者3（前書き）

お久しぶりです。

### 新たな襲撃者3

「まだ、終わりではありませんよ」  
魔法師が呟く。

「私たちには、主から頂いた“力”がありますから」  
そう言つて魔法師は懐から黒い玉を取り出す。

「あれは…」

ユティシアは驚きに目を見開く。

黒い玉：あれを、ユティシアは一度だけ見たことがある。

4年前の戦争。国民が反乱を起こした時、あれを手にしていた。あれを使われたことによつて城の一部が崩れ、父と母は。

ユティシアはぶんぶんと首を振つた。

今は、そんなことを考えている場合ではない。あの玉には禍々しい魔の力が込められている。あれを完全に開放すれば、ここにいる皆の命は無いのだ。

なす術もなく見守っているうちに、魔はどんどん膨れ上がっていく。それこそ、王都を包み込むほどに。先ほど倒した最強ランクの魔物が発する魔の比ではない。

…そして、ついに王都を覆っていたユティシアの結界が破壊される。あれは、ユティシアが今まで織りなした中でもとくに魔力を込めて丁寧に構成した結界だ。いままでその結界を壊す存在など見たことがなかった。

あの玉を壊すなら、完全に解放される前しかない。

ユティシアは再び魔力を解き放つ。

銀色の魔力が自分を覆っていく。

ディリアスはユティシアの魔力を見て驚いていた。彼女の魔力の中には銀だけでなく、青も混ざっている。

彼女の、魔力の色ではない？

ユティシアは魔力を開放しきった瞬間

気を失った。

魔の解放はユティシアの魔力で抑えられて敵は力を失った。

その後敵は捕らえられたが、すべてのものが魔に憑かれて操られていたことが判明した。

長い間最強ランクの魔物が“光の盾”に発見されずにいたのは何故なのか、魔法師の言った“主”とは誰なのか…多くの謎が残るまま事件は終わった。

### 新たな襲撃者3（後書き）

やっと戦いが終わりました。

話変わって…。

4月の初めから玄関にツバメが住み着いております。レンガタイルの壁のため、いつ巢が落ちるかと心配ですが…。  
現在、ツバメのつがいがやかましくさえずっております。仲の良い姿に微笑ましく思えばかりです。

そして、デイリアスさんとユティシアさんにもそんな仲の良い夫婦を目指してもらいたいと思います。次からはかなり（少し？）、恋愛の方を進めていきたいです。

戦闘や敵の登場などはやはりぐだぐだになってしまいました。まだまだ力量不足です。

私は文学部なので、これから大学で小説についても学んでまいります。良い小説を読者にお届けできるようこれからも頑張ります。

## 魔封じ1

デイリアスは休んでいたせいで溜まっていた政務の処理に追われていた。いつも以上の速さでペンを動かし決裁の終わった書類を積み上げていく。

「陛下、新たな書類です」

そんなデイリアスに追い打ちをかけるように、ローウェが新たな書類を積み上げていく。

デイリアスは自分の執務机に塔のように積まれたそれに眉をひそめた。

「次は何の書類だ？」

「魔物の出現の件で」

次々に起こった大きな事件で仕事が増えていく状況にデイリアスは不愉快そうな顔をする。

「王妃様に会いに行くのは当分先になりそうですね」

ローウェの言葉に、デイリアスは机にがっくりと突っ伏す。

「そつえば、ユティはどうしている？」

あの王都襲撃事件から、3日経っていた。ユティシアは気を失ったまま部屋で眠っていると聞いていた。魔力の枯渇のせいだろうか？…と最初は気にしなかったが、時間が過ぎていくにつれてだんだんと不安になってきた。

「それが…目は覚まされているようなのですが、部屋に入るのを禁じられておりまして…」

執務室に呼び出したミーファから聞いたのは、驚くべき事実だった。実は2日前に目を覚ましていて、それからずっと入室を禁じられているのだという。水や果物をベッドの傍に置いてきたが、きちんと食事をとっているかまでは定かではない。

「少し、様子を見てくる」

山積みの書類を前にペンを放り出し、ディリアスはユティシアの部屋へと足早に歩きだした。

「ユティ、俺だ。入っていいか？」

こんこん、と扉をノックして入室の許可を得ようとするが、反応はない。

「ユティ？」

ディリアスはドアを開けた。                   しかし、そこにユティシアはいない。

「まさか、寢室か？」

まだ臥せているのか？と心配になったディリアスは、慌ててドアを開け放った。

その瞬間、ディリアスに向かって突風が吹いてきた。まるで、部屋の中から何かがあふれてきたかのように。

それは、魔力の奔流だった…銀色の。

その事実気づいた時、ディリアスは真っ青になって彼女の名を呼

んだ。

「っ…ユティ！」

「へ…陛下…？」

ユティシアの、かすかな声が聞こえた。

それをきっかけに徐々に魔力は静まっていった。

「ユティ、大丈夫か…？」

「出て行…って下…さい」

デイリアスが肩に触れると、ユティシアはそれを振り払った。

「はや…く。これ以…上は、魔力を、抑えられ…ません」

やはり、魔力の暴走だったか。

デイリアスは何か思案するように顎に手を当てながら、何も言わずに部屋を出て行った。

良かった…。

ユティシアはほっと息を吐く。気を抜くと、再びだんだんと魔力が体から出て行く。

こんなことになったのは久しぶりだった。

騎士団での仕事を始めた時は自身の魔力を解放することに慣れなくて、頻繁にこうなっていた。だが、仕事に慣れてくるとそんなこともなくなっただけで安心していただのだ。

もともとユティシアの魔力は多い。今まで魔力不足に陥ったことは無かった。今回の魔力解放ですら、完全に魔力が無くなってしまっには到らなかった。

ただ、莫大な魔力を使用することに体が耐え切れないのだ。限界を越えると、もともと甘い魔力の制御が、完全に機能しなくなる。

そして、魔力は暴走し始める。

解放し続けた魔力がなくなればいいのに。そうすれば魔力が暴走することもない…そう思うが、今までユティシアの願いが叶ったことはない。

戦っている間は何も起こらない。家に帰って休んでいると徐々にその症状が出てきて、四、五日くらいは魔力が体から抜け続ける。

そして、その後に襲ってくる激しい虚脱感。ほとんど体を動かすこともできずに一週間過ごすのだ。その間は、食べることもすままならない。何とか水を飲んで命をつなぐ。…自分が痩せている原因がそれでないとも言い切れない。

ユティシアは布団に顔を埋め、魔力が抜けていく何とも言えない感覚に耐える。

全身に力が入らずぐったりしている。体を動かす気力もない。

お風呂：入りたい…。

ふと思ったことは、頭から離れない。なんせ、三日も入っていないのだ。

…そんなことを思っていると、再びドアの向こうに人の気配がした。慌てて魔力を抑え込む。これは短時間しかもたない。

「ユティ？」

現われたのは、ディリアスだった。

「陛下、来ては駄目とっ…」

そんなユティシアの制止も聞かずにディリアスはユティシアに歩み

寄った。

「ユティ、プレゼントだ」

そう言っつてデイリアスが手首にはめたのは、高そうな腕輪だった。精巧な装飾が施された銀の腕輪は、二つの緑の石に挟まれるようにしてデイリアスの瞳と同じ色の大きな石がはめ込まれていた。

「あ…れ？魔力が…」

魔力が、抑えられている。

「そつだ。これは魔封じの輪だ」

大きさは自在に変わるらしく、もともとは魔物の使役に使われていたらしい。デイスターの王族にしか使えない物で、魔眼の力を利用して魔を完全に抑える能力を持っている。城の宝物庫に眠っていたものらしい。

「だが、俺の魔眼は覚醒前だからな、対象から離れると効力が無くなるんだ」

だから、と言っつてユティシアを抱き上げた。

「当分俺からは離れては駄目だぞ？」

デイリアスはユティシアの頬に口づけ、笑みを浮かべた。

…離れようにも、そんな体力は今のユティシアにはなかった。

## 魔封じ2（前書き）

風に舞うが1000P、闇に咲くが800Pに到達していました。  
また減るかもしれませんが…。

感謝をこめて（？）、「ユティシアを除く皆さんが暴走します。

## 魔封じ2

ユティシアの願いにより、ミーファの補助付きで入浴と着替えを許可し、それが終わるのを待っていたディリアスだったが。

「陛下、仕事に戻ってください…とローウェ様が」  
リーゼがローウェの愚痴を伝えにやって来た。

ディリアスは心の中で舌打ちすると、着替え終わったばかりのユティシアを抱き上げて部屋を出た。

「ちよつと、陛下？どこへ行くつもりです」

「執務室だ」

「では私を置いて…」

「三日間分の掃除をしなければならぬので、部屋には戻らないで下さい」

ミーファが逃げ道をふさいだ。…それでも二人の仲を応援しているのだ。

ローウェは悩んでいた。

他でもない王妃様の体が心配ではあるのだが…だが、王妃様にかかりつきりになると、きっと陛下は日が暮れても戻ってこないだろう。そうすると、この大量の書類をどうすればいいのだろうか。

実は、シヤラ様の“面倒くさい書類は息子にでもやらせましょう”の一言が発端で陛下が城にいなかった際の書類が未処理のまま、しかも先ほどシヤラ様が陛下の机の書類の間にその未決済分をこっそり忍ばせておいた。　　だなんて言えはしないが。

先ほどリーゼに陛下をお呼びするよう言っておいたが…ゼイルもアルも執務室で休憩している現状を見たら、怒髪天を衝くのは間違いなさそうだ。

そんなことを考えていると、陛下が返ってきた  
王姫様を大事  
そうに腕に抱いて。

「陛下！？何をなさっていたので…」  
ローウエはぎよっとした。

王姫様を見ると、ひどくぐったりとしていて、僅かに身じろぐ程度だ。これはまさか…。

ゼイルを見ると、同じことを考えているようだ。いつも能天気なはずのゼイルの顔は青くなっていた。

アルは…さすが10歳。全く分かっていないようで、首をかしげている。

「何か問題でもあるか？」

「大ありですよ！王姫様に何したんですか？」

「は？何のことだ？」

「へーか、俺はしょーじきに言った方が良いと思うね」

ディリアスは二人の会話に首をかしげるばかり。

ああ、狼の手から王姫様を取り戻したい  
ローウエとゼイルは  
心の中でそう叫ぶ。

そんな騒ぎを繰り広げていると、ドアがぱんつと開け放たれる。

「ユティシアちゃんが回復したんですって？」

…そこでシヤラは固まってしまった。

「いやああああ！何してるのよ、馬鹿息子！可愛いユティシアちゃんに…」

誰が見てもそうとしか見えないらしい。

現に、主人の危機を察知したのか、シルフィとアルヴィンが毛を逆立てていつの間にかディリアスの前に立ちはだかっている。

シルフィの攻撃にディリアスが気をとられている間に、アルヴィンが自由自在に伸びる尾を駆使してユティシアを取り戻す。

取り戻されたユティシアは、シャラに抱きしめられてローウェヤゼイルに囲まれる。

「おーひさま、無事？」

「馬鹿息子に何されたの？私の部屋で心の傷を癒しなさい」

「王妃様、とりあえず陛下から離れましょう」

そして、四人と二匹はディリアスをきつと睨みつける。

アルも、状況が分からないながらも、師匠の危機に立ち上がったよ  
うだ。

ディリアスは意味の分からないまま、立っていた。これでは、自分が悪者のようではないか。

「ちよつと待て。落ち着いて話せば…」

その時、ディリアスに救世主が現れた。

「お父様〜!!!」

険悪な雰囲気をついに元の元気な声が打ち破る。

「お母様、元気になったの？」

空気を感じ取れない幼いフィーナは、目をキラキラさせてディリアスを見上げながら尋ねる。

「ああ、魔法の使い過ぎですごし疲れているようだけどな」

「疲れているの？」

心配そうな顔で、ディリアスを見る。

「大丈夫だ、すぐに良くなる」

「本当に？」

「ああ」

頭を優しく撫でられてフィーナは恥ずかしそうに笑みを浮かべた。

「……て、おーひさまへーかに襲われたんじゃないの？」

つい心の内を暴露してしまったゼイルを筆頭に、皆がディリアスに疑いの視線を向け続けている。

「誰が襲った？」

信用ならないディリアスの言葉は無視して、シャラはユティシアに尋ねる。

「ユティシアちゃん、本当に？」

「……………はい」

ユティシアに事実を確認すると、皆ほっと息を吐いた。

「魔力の暴走の後遺症で、倦怠感があるだけだ。変な誤解をするな」

まったく……とか言いつつも、そのままディリアスはユティシアを取り返し、膝にのせて執務を始めた。

ユティシアは困っていた。

先ほどの騒ぎから抵抗する気力もなく、状況に流されるしかないのだが……。

それにしても、執務中の陛下の膝に乗っているなんて、邪魔になっ

ているとしか思えない。しかし、陛下が離してくれる様子はない。仕方なくユティシアはペンを持つ右手の邪魔にならないよう、陛下の左側の方に体をもたせ掛けた。そして、こてんと首を傾けて完全に体を預けると、デイリアスが笑って胸元にユティシアの頭を引き寄せた。

そのまま機嫌な陛下は高速でペンを動かし、判を押していく。…それこそ、シャラが入れた書類の存在に気づかないほどに。

「やっぱりすげーな、王妃様は。さすが俺の師匠」

「そうですね。最初は陛下が仕事を放棄されるかと気が気でなかったのですが、王妃様のおかげで逆にはかどっていますね」

「おーひさまは、へーかの原動力だねえ」

3人は口々に感想を述べ合い、ユティシアを称賛している。

ちなみにシャラは騒ぎが収まると「つまんなーい」などと言いながらフィーナを連れて出て行った。…たいそうこの騒ぎを楽しんでいたらしい。

「そろそろ、休憩にするか」

席を立ちあがったデイリアスが言った。

お前たちはすでに休憩しているようだが…などと、普段の調子なら嫌味の一つも飛び出しそうだが、ユティシアのおかげでそんなこともない。

「陛下、お茶を飲むときくらい下ろしてください」

「良いじゃないか、三日ぶりに顔を見たんだぞ。ユティは、寂しくなかったのか？」

「それは…陛下にはお会いしたかったですけど…」

「なら、口づけも許してくれるよな？」

とかなんとか、ソファの片側では甘い展開が繰り広げられている。

もう片側のソファでは、二人の時間を邪魔しないようにと男三人が身を寄せて座っているのだが。

「おれ、砂糖いらねえわ」などとアルは紅茶にそのまま口を付け始める。二人も同意して紅茶に手を伸ばす。 だって、目の前が激甘なんだもん…。

そんなこんなで、執務室の騒がしくも平和な時間は過ぎていく。

平穩で、明るい日々…それは、いつまで続くのか。

### 魔封じ3

ユティシアは完全に体が動かせるようになるまでデイリアスに世話を焼いて貰うことになったのだが。

「ほら、口を開けて」

「……………」

ユティシアは納得できないながらも食事を含む。

食事の世話までしてもらうことになるとは…。

そういえば、こんなことが前にもあった。あの時、二度とデイリアスに食べさせてもらうことがないよう頑張っただけと誓ったのだったが、今の状況はどうしたことが。

ちなみに食事だけでなく、朝起きてから夜寝るまでデイリアスと一緒にいる予定になっている。最近では事件続きで公務が取りやめになり、しかも書類もほとんど片づけてしまったらしく彼はたいそう暇なようだ。

確かに、誰かの力がないと水を飲むことさえも難しいのだから、ありがたいのだが…デイリアスにそれをさせるのは躊躇われる。王妃が陛下にこんなことを頼んで良いのか。いや、そもそも妻が夫にさせることではない。

デイリアスは、数日食べていないので胃が弱っているユティシアに果物を用意するなど、すごく気を使ってくれている。

「ほら、これが最後だ」

最後の一口をユティシアに食べさせると、自分も最後の一口を食べ

る。

デイリアスの世話焼きはこれだけでは終わらなかった。

「ユティシア、風呂も一緒に入るうか？」

「いえ、それは……」

「フィーナも、おとうさまとおかあさまと一緒に入るー！！」

突然現れたフィーナは、そう言っつてユティシアに抱きついた。フィーナにお願いされたユティシアは                    あっさり陥落した。

「ユティ、体を洗ってやる」

「それはさすがに……」

「フィーナも洗ってあげる！！……おかあさま、いや？」

「……どうぞ」

フィーナの、体調が思わしくない母に対する気遣いは嬉しいはずなのに、ありがたいはずなのに                    今この瞬間だけは、それがユティシアを追い詰める結果となっている。

フィーナの援護によつてデイリアスの望み通り事が運んでいく。結果的に、ユティシアはデイリアスの世話焼きに身を任せるしかなかった。

「ユティ、のぼせていないか？」

「大丈夫です」

精神的にはまったく大丈夫ではないのだが。

「フィーナも、熱くないか？」

「うん、きもちいい」

デイリアスはフィーナが溺れないように注意しながら、二人の体を温まらせている。

ちなみにデイリアスは気を使ったのか、ユティシアにバスタオルを纏わせている。無論、脱ぐときに裸を見られているので、意味はないのだが。

入浴後、デイリアスはフィーナを部屋に返し、ユティシアを寝台に運んだ。

「そういえば、魔封じの腕輪のおかげで、子供の問題は解決するな」  
デイリアスは嬉しそうに笑みを浮かべながらユティシアに尋ねてきた。

確かにそうだった。この魔封じの腕輪はユティシアの魔力を完全に抑えていた。これで、魔眼と魔力は反発するおそれはない。

「本当ですね……」

「こんなことも、遠慮なく出来るわけだ」

デイリアスはユティシアに優しく唇を重ねた。そして、頭の後ろに手を添えると、深く、深く口づける。

確かに、触れることが危険と言ってからデイリアスはユティシアに触れることを少しだけ、憚っていた。最近の行動は、その反動だろうか？

ユティシアは突然のことに驚いて、頭が真っ白になる。

「……………陛下っ……………」

突然のことに、力のない手で前にある胸を押しのけようとしたが、出来なかった。突然自分を抱きしめた腕は、思った以上に力が強く、

「良かった……。本当に、子が出来ないと聞いたときは、ユティに触られないと分かった時は、どうしようかと思った……」

デイリアスの吐露した思いに、ユティシアは胸が熱くなる。

「本当に、方法が見つかってよかった」

デイリアスはそう言っ、今まで見たこともないような眩しい笑顔を見せた。

ユティシアも、その綺麗な笑みにつられて口元が緩む。

「陛下の今の笑顔、素敵です。もう一度、見せてください」

その言葉に、デイリアスは一瞬驚いた顔をする。だが、もう一度笑みを浮かべてユティシアを見つめる。

「ユティの笑顔は華のようだ」

「陛下の笑顔はお日様みたいです」

そう言っ二人は顔を見合わせ、微笑みあう。

「陛下、私、陛下と家族になれて良かったです」

そう言っ、ユティシアはデイリアスの首に抱きついた。

子供ができるのだと嬉しそうに喜ぶデイリアスを見て初めて、心の底から嬉しいと思った。幸せだと感じた。

デイリアスはユティシアの額にキスを落とし優しく布団をかぶせて、二人は眠りに就こうとしていたのだが。

デイリアスはふと浮かんだ疑問を口にした。

「もしかして、子供が出来ないから女として見て貰えないと思っ  
ていたのか？」

「……………」

図星のようだ。

ユティシアは思わずデイリアスから視線をずらす。

デイリアスに女として見てもらえないということ

それは同

時に、ユティシアもデイリアスをそういう対象として見ていなかっ  
たということ。

デイリアスは呆れたような表情をしてユティシアを見る。

ユティシアはむうとデイリアスを見る。

仕方がないのだ。子ができない王妃なんて、愛情を注いでもらえ  
ると思えなかった。

しかし、ユティシアはあることに気づき、その思考を止めた。

だが、デイリアスは当初子供が出来ない事実を知らなかった訳で、  
それはつまり、自分は最初から彼にとって

デイリアスはぽつりと呟いた。

「……………恋愛対象に」

その言葉に、ユティシアはぴくりと肩を揺らす。

「これから、俺はユティの恋愛対象に入るわけだな？」

甘い笑みを浮かべてユティシアに口づけた。

ユティシアは、顔を真っ赤にして俯いていた。

不覚にも初めて、デイリアスを男性として認識してしまったのだ。

ディリアスはその反応に、にこっと笑みを浮かべてユティシアの頭を撫でた。

初めて見せた彼女の反応は、可愛くて仕方がなかった。

ユティシアは心の壁をすべて取り去った。

どれだけ伝えても届かなかった想いは、彼女の心に届き始める。

白銀の華は闇を打ち払い

陽の下にその姿を現した

### 魔封じ3 (後書き)

お久しぶりです。更新遅れてすみません。

ルーターを交換したところ、インターネットにつながらなくなっていました。

インターネットの使えない生活なんて、死んでしまおう!!と思いき死で方法を模索した次第です。

知識を持つ方に協力して頂き、何時間もかけてLANがつながりました。

最終的にはルーターのボタンを連打!!! したらあっさり繋がったワケですが。…不良品ですか、コレ?

たぶんそろそろ(あと一話くらい?)闇に咲くは完結します。完結しないことも考えたのですが…。

読者様にはすぐ聞き捨てならない事実だと思います。だって、メイン二人の関係はまだ……。

ユテイシアさんとデイリアスさんが両思いになってないのに終わるなよ!!という読者様からの熱い文句は受け付けますが、完結を覆すつもりはございません。

## 魔封じ4

デイリアスも通常通りの執務に戻り、ユティシアも王妃としての仕事を始めていた。

あれほどの事件があつた後なので、民を安心させる意味も含めて二人は精力的に公務を行った。

そんな日々も何とか落ち着き、ディスタール王城には再び日常が戻ってきていた。

いつも通りに執務室に集合する面々。

そして、いつも通りにソファに座りお茶を始める。もちろん、デイリアスはユティシアを隣に座らせて。

のんびりと紅茶を飲むうちに、皆の話は自然とユティシアに関する話題に移っていった。

「まさかユティシアちゃんが、『白銀の舞姫』だったなんてね」

「『白銀の舞姫』というと、大陸一と言われている魔法師ですね。

何というか…想像できませんね」

「俺だって最初は豪傑って感じの女を想像していたな」

ユティシアの可憐な容姿では、戦いの中に身を投じてきたなどとは…ましてや、最強と呼ばれる存在だとは、誰が想像できようか。

「本当に今までよく生きていたものだ」

デイリアスは眉間にしわを寄せながら、言った。

彼からしてみれば、ユティシアの行いは冷や汗ものだ。もし彼女が戦闘で命を落としていたら、今彼女はここにいなかったかもしれないのだ。

「ユティ、魔力の暴走は今まで何度かあったのだろうか？魔力切れを起こすことはないのか？」

デイリアスは心配そうに聞く。

魔力切れは、魔法師の命にかかわる問題だ。

実は、魔法師はある一定量の魔力を体にとどめておく必要がある。魔法師の体内には、魔力を貯蓄するための“器”が存在する。人が生命維持に栄養を必要とするように、“器”の維持には魔力を必要とする。

魔法がほとんどなくなると、それを補うために魔法師の命が削られ始めるのだ。

ユティシアのように魔力の暴走が止まらずに、最終的に命までも削っていくことになったら…と考えると、恐ろしくなる。

「ないです。魔力の回復も早いので、騎士団時代には仕事を連続で入れても問題はなかったのです」

…ちなみに騎士団時代のこと、デイリアスの巧みな問い詰めにより皆に全部露見している。

ユティシアの発言に、魔法を使うゼイルとアルは驚きの声を上げた。

それなりに大きな魔力を持っている彼らから見ても、ユティシアの魔力量はおかしい。魔力切れは魔法師にとって心臓と同じくらいの最大の弱点なのに、それが無いなどは…羨ましすぎる。

そうすると、ユティシアは本当に魔法師の弱点を持っていないことになる。

魔法師の弱点と言われるのは、呪文の合間にできる隙、集中力不安

定よる魔力の乱れ、近距離戦闘に不向きな点などが挙げられるが、彼女はすべてのすべてに当てはまらない。

呪文は詠唱を破棄しているし、彼女は戦い慣れていて集中が切れることはない。敵と接近して戦うのは、今までの体術や剣術を見る限り彼女はむしろそれを得意としているようだ。

さらに魔力切れがないとなれば、彼女は本当に弱点がない。

しいて挙げるとすれば、魔力の大量消費による暴走。そして

魔眼だけだ。

しかし、その二つは弱点にもならない弱点だ。

暴走するほど彼女が魔力を消費する機会はほとんどなく、唯一強い魔眼を持つデイリアスは彼女の味方だ。

「しかも、魔力の制御については、大量に魔力を消費する機会が増えれば克服可能です」

…大量に使っていくうちに魔力の消費に慣れるそうなので、とユティシアが付け足す。

魔法師の二人は絶句。

「それって…敵なしだろ」

「まさに最強つてやつだよねえ」

うんうんと頷きあうアルとゼイル。尊敬の念からか、アルはきらきらした瞳でユティシアを見つめている。

「何か、ユティに弱点はあるのか？」

「しいて挙げるとすれば、魔は侮れませんね。精神に作用しますしユティシアは険しい顔をした。」

そこでディリアスが思い出すのは元魔法師長が出した黒い玉。あれは、禍々しい気配を放っていた。この世にあってはいけぬ物だと、感じ取った。

「でも、最強ランクの魔物にだって、勝ってるし。魔とか敵じゃないでしょ〜」

ゼイルがからからと笑い、ユティシアも笑みを浮かべる。だがその瞳は、複雑な色を宿していた。

彼女は、警戒している。それも、魔物を易々と倒してしまう彼女さえも恐れるほど、とても大きな存在に、だ。

元魔法師と騎士団長が言った、あの言葉。

彼らの言う、力を貸してくれた主とは、誰なのか。そして、その主は何故、この国を狙ったのか。

彼女はきつと、何かを隠している。

彼女の澄み切った輝く瞳は、いつも変わらない。しかし、その瞳の奥深くには、ディリアスの知らない何かがある。

あまりに大きなものを背負っている彼女。

これから、逃げ出したくなるほどの困難が待ち受けているかもしれない。

あまりに無力な自分では、彼女の抱えている物を共に背負いきることは、出来ないのかもしれない。

だが、それでも。

彼女を支え続けていたいと思う。共に歩みたいと思ったのだ。

どうか、このまま  
を、祈るばかりだ。

何も起こらずに過ぎ去ってくねる日々

白銀の華は、闇を打ち払い、咲き誇った

その輝きは 世界を動かし始める。

闇に咲く白銀の華 完

## あとがき

こんにちは、いえ、お久しぶり…と言った方がよろしいでしょうか？作者のばにえです。

あと一話で終わると言っておきながら、なかなか更新せずに申し訳ありません。

実は大学の方が思った以上に忙しくてですね…。誰だ、1年生はもの凄い暇だと言った奴は（その暇な時間をすべて小説に注ごうと決めていた作者）。

実力不対応な大学に入学してしまったせいで死にそうな生活を送っています。

最近特に大学の課題をする時間が作れない＋睡眠不足という有様です。部活動やサークルにもまだ入っていないのに、この忙しさ。大学生って大変ですね。

そんなわけで、作者は当分の間小説を書けそうにありません。読者様には申し訳ないですが、ここで一区切り…という形にしたいと思います。

闇に咲くゝは、風に舞うゝに比べて正直つまらなかつたのではないかと思います。たぶん幕間クライマックスに向けての序章…的な役割になっていないでしょうか。

そういえば、小説を書く際には『プロット』なるものが必要なのですね。最近勉強いたしました。私の場合はすべて頭の中で構成して小説を書いていたので、知りませんでした（よくよく考えたら、効率の悪い方法でした）。

短時間の記憶には自信ありの作者です（高校の時は小テストの直前10分で50個の英単語を覚えるという荒業をやっていました）。

最近気づいたのですが、ローウエ、ゼイル、ミーファ、アルの容姿に関する記述がないですね。アルの見た目がよろしいということぐらしいか書かれていないようです。

…ですが、読者様からはまったく苦情が来ないので、良しとしまし  
よう。

読んでいく上で不都合な点がありましたら、何なりと言って下さい。ただし、作者の文章力では修正できない場合もあります。

ここまで読んでいただいております。アクセス数を見ると、とんでもないことになっておりました。それだけたくさんの方に読んでいただけて作者は感激です。

目標にしていた風に舞うの1000ポイント達成もできて、嬉しい限りです。

ちなみに白銀の華はまだまだ続きますので、余裕ができれば必ず投稿いたします。大学に慣れるまで勘弁してくださいませ。

では、また再開&再会できる日まで。

## オマケ（前書き）

オマケを投稿するのを忘れておりました。

ユティシアがシルフィ、アルヴィンと出会う前。騎士団初任務のお話です。

## オマケ

「おう、お前喜べ。初任務だ」

「はい……？」

師匠は帰って来るなり、任務内容の書かれた紙をユティシアに渡した。

依頼書に目を通していくうちに、ユティシアの顔色がどんどん変わっていく。

「あの、最強ランクの魔物討伐って……」

初任務でこの難易度はあり得ない。せめて中級くらいから始めるとか……とユティシアは思う。

「大丈夫だ、安心しろ。そんなに強くない」

「最強ランクはどれも強いですけど」

「まあ、俺も付いて行ってやるから」

付いて来てくれるというだけで、危険な時に手を貸してくれるとはとても思えないのだが。

「とりあえず、行くぞ」

連れて行かれたのは、迷子になりそうなほど深い森の中。魔が嫌と

いっほど充滿していて、息が詰まりそうだ。魔を可視化したら、完全に視界が遮られそうなほどに嫌な空気だ。

「ほれ、シア。餞別だ」

「……………へ？」

師匠がユティシアの首の後ろに手を回し、付けてくれたのは綺麗な首飾りだった。容姿の整った師匠にこんなことをして貰った日には、女の子は泣いて喜ぶだろう。しかし、結構な値段のもので、少なくともこれから戦闘を行う者に身に着けさせる物ではない。

そうではなくて、問題は、それが呪いの首輪だったことだ。魔法を使えば一瞬で心の蔵が刺し貫かれ、死に至るという代物だ。

「魔法は禁止。剣のみで勝って見せる。勝った暁にはそれを外してやる」

「……………」

魔法がないと、シアは無力に等しいのだ。正直、剣で戦うにしても魔法で身体強化を行わなければ魔物の速さにもついていけないし、力負けしてしまうことは目に見えている。魔法もなしに普通に戦っている師匠はもはや人間ではない。

だが、これ以上文句を言っても無駄だと悟ったユティシアは何も言わず、去っていく師匠を見送った。

「さてと……………魔物を倒しますか」

呪いの首輪で死ぬか、魔物に食い殺されるか……………どちらにしろ、死ぬ確率は果てしなく高い。だったら

「全力で戦うしかない」

ユティシアは剣を握りなおした。

ぎゃあああああ……。

魔物の方向が森中に響き渡る。ばきばきと森の木がなぎ倒されて、魔物の位置が容易に掴める。

来る！！

ユティシアは剣を構え、目をかつと開く。魔物の動きは一瞬たりとも見逃せない。その一瞬が命取りになる。……特に、最強ランクの魔物が相手では。

しかも、今日は大剣が使えない。身体強化なしでも使える剣を握っているユティシアは、普段の感触と違うそれに眉をひそめた。

木の生えていない開けた土地で、ユティシアは魔物を迎え撃つ。

しかし。

「うっ」

初撃は何とか躲したものの、それ以降は防ぎきることが出来ない。ユティシアの身体には、つきつきに傷が増えていく。普段日の下に晒さない白い肌は、見る見るうちに真っ赤に染まっていった。

このままでは、負けてしまう……。そう思ったユティシアは、何か利用できるものがないかと辺りを見回す。

だが、周りに見えるのは森。日の光も差さないほどに密集した木々

のみ、だ。

木……もしかして……？

ユティシアの脳裏に浮かんだのは、先ほど魔物が森を移動していたときの光景だ。木々をなぎ倒して進む魔物の動きが手に取るように分かった。

これならば、きっと。

ユティシアは森の奥に向かって駆け出した。

魔物もユティシアを追って来るが、木々が邪魔をしてうまく進めず攻撃を放つても簡単に避けられるものばかりだ。

ユティシアの思惑は成功した。この木は、深く根を張る上に普通のものより木が堅いのだ。案の定、魔物の動きは鈍くなり、魔法を使わないユティシアでも何とか対峙できる速さになっていた。

だが、このまま逃げ回っているわけにはいかない。多くの木々を破壊して森林破壊も甚だしいし、このままでは魔物を仕留めることは出来ず、体力を削るばかりだ。ユティシアの体力は周りの魔力を糧にしている魔物より先に尽きるだろうし、魔物の外殻は普通の剣では貫くことが出来ないくらい非常に硬いので、逃げ続けて力の落ちた生半可な攻撃では太刀打ちできない。

ユティシアは足を止め、迫ってくる魔物に対して正面を向く。

そして　　鋭い牙がのぞくその口内に飛び込んだ。

次の瞬間、魔物は悲鳴を上げる間もなく倒れた。首と胴がずれ、身の柔らかい内側から切られたのだということが分かる。

「終わった……」

ユティシアは魔物の体を切り裂いて姿を現した。

師匠は、ユティシアを追い詰めているように見えて、勝てる条件を最低限用意してくれていた。まあ、最低限……だが。

「おう、よくやったな」

師匠が姿を現し、ユティシアの頭をわしわしと撫でる。その手は乱暴だったが、温かいものだった。

「ほれ、今度こそちゃんとした餞別だ」

師匠はユティシアに“光の盾”の騎士団認定証を渡す。それは、ユティシアがずっと望んでいたものだった。ユティシアは、それを大事そうに胸に抱き込む。

だが、ユティシアは知らなかった。

“狩人”の称号を唯一持つ師匠は最強ランクの魔物の依頼全てを受けないといけない。それが面倒くさくなった師匠は、後々ほとんどの仕事をユティシアに押し付けるつもりで彼女に“狩人”の称号を与えたのだとは。

ユティシアが仕事をこなすのに問題ない力量を身につけると、師匠はユティシアの前からあっけなく姿を消したのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8479m/>

---

闇に咲く白銀の華

2011年7月17日11時08分発行